第5回サステナブルデザイン国際会議

Destination 2022 10

デスティネーション2022

The 5th International Conference of Design for Sustainability

報告書

Report

テーマ　ローカル・サステナブル・コミュニティ
Local Sustainable Community

地域固有の条件、多様性、文化、風土など、地域に根差したコミュニティ、産業、暮らしが社会のサステナビリティには深く関わります。第 5 回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022 は、「ローカル・サステナブル・コミュニティ」をテーマに掲げ、東北・山形県にて開催しました。地域の持つ自然と風土、そしてそれらに育まれる社会の関わりから、私達個々人々の将来の暮らし方のビジョンを考えました。

1 第 1 回目の会議でのエツィオ・マンズィーニ教授ご講演の様子。2 第 2 回では到達すべきサステナブルな社会の姿を、絵巻「エコイノベーションで実現するサステナブルなライフスタイル 2025」として描き、時の総理へと提出した。

1

2

photographed by The International Conference of Design for Sustainability

サステナブルデザイン国際会議 開催歴

第 4 回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2009-2023

テーマ： **Social Innovation-ing**
社会イノベーション進行形

■ 内容：社会イノベーションを進めるにあたって、自分達の足下を見つめ直した。若い世代が取組むサステナブルなビジネスモデルの事例発表を通じ、社会イノベーションとデザインの関わりの可能性をより身近に感じる会となった。■ 講師:アレックス・カー（アメリカ）、熊野英介、黒崎輝男、西村佳哲 ■ 会期：2009 年 3 月 13 ～ 14 日 ■ 会場：桑沢デザイン研究所 1F ホール、東京ミッドタウン・デザインハブインターナショナル・デザインリエゾンセンター ■ 参加者数：208 名（内海外より 8 名）■ 主催：サステナブルデザイン国際会議実行委員会 ■ 共催:学校法人桑沢学園（東京造形大学、東京造形大学大学院、桑沢デザイン専門学校）

第 3 回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2008-2024

テーマ： **Steer toward Sustainable Society**
サステナブルな社会に向けデザインの舵を切る

■ 内容：「行動するデザイン」の在り方を議論。「サステナブルデザイン行動宣言」を採択した。■ 講師：星川 淳、トム・ジョンソン（アメリカ）、ラッセル・ケネディ（オーストラリア）、アアリス・シェリン（アメリカ）■ 会期：2008 年 12 月 7 ～ 9 日、12 日 ■ 会場：港区立エコプラザ、東京ビッグサイト ■ 参加者数：177 名（内海外より 11 名）■ 主催：サステナブルデザイン国際会議実行委員会 ■ 共催：学校法人桑沢学園（東京造形大学、東京造形大学大学院、桑沢デザイン専門学校）、港区立エコプラザ

第 2 回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2007-2025

テーマ： **Drawing a land map of a Sustainable Society**
サステナブルな社会のランドマップを描く

■ 内容：世界遺産白川郷を会場に、到達すべきサステナブルな社会の姿を描いた。成果は絵巻物「エコイノベーションで実現するサステナブルなライフスタイル 2025」として編纂し、「地球温暖化に関する総理懇談会」にて山本良一組織委員長より総理に提出した。■ 講師:山本良一、谷口尚（白川村村長）、黒崎輝男、アーネスト・ヤン・ヴァン・ハッタム（スイス）、シンギー・カルトノ（インドネシア）■ 会期：2007 年 12 月 21 ～ 23 日 ■ 会場：トヨタ白川郷自然學校（岐阜県）■ 参加者数：115 名（内海外より 12 名）■ 主催：サステナブルデザイン国際会議実行委員会 ■ 共催：SPEEED 研究会、国際ユニヴァーサルデザイン協議会

第1回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2006-2026

テーマ： **Finding a way to a Sustainable Society**
サステナブル社会へのロードマップを探す

■ 内容：サステナブルデザインに関わる様々な領域からの発表を通じ、細分化されたデザイン専門領域を超えた統合的デザイン活動を開始することが火急の課題であることを確認し、「サステナブルデザイン宣言」を採択した。■ 講師：山本良一、フィリップ・ホワイト（アメリカ）、加藤公敬、赤池学、井口浩、池上俊郎、石田秀輝、植松豊行、川原啓嗣、ジャッキー・デーン（イギリス）、益田文和、テイ・ケエン・スーン（シンガポール）、黒崎輝男、マリア・シシリア・ロスキッポ（ブラジル）、エツィオ・マンズィーニ（イタリア）、フランソワ・ジェグ（フランス）■ 会期：2006 年 12 月 14 ～ 16 日 ■ 会場：東京ビッグサイト ■ 参加者数：267 名（内海外より 32 名）■ 主催：サステナブルデザイン国際会議実行委員会 ■ 共催：国際機関 APO（アジア生産性機構）

第 5 回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022　報告書

■ もくじ

02 サステナブルデザイン国際会議 開催歴／もくじ
03 はじめに
04 開催概要／後援・協賛・協力
05 プログラム

第 5 回サステナブルデザイン国際会議 — 基調講演会

第 1 部　グローバル・パースペクティブ
06 講演 1「現在の地球環境、世界の状況」山本 良一
08 講演 2「スモール・ローカル・オープン・コネクテッド～シナリオから見えてくるネットワークとサステナビリティの持続」エツィオ・マンズィーニ
第 2 部　ローカル・パースペクティブ
09 講演 3「山形精神文化考／東北文化−山の形をした魂」千歳 栄
10 講演 4「自然と生きる～手作りの暮らし」ベニシア・スタンリー・スミス
11 アトラクション「サスティナブルデザインアイデアコンペ、全国高等学校デザイン選手権大会 2010　優秀提案プレゼンテーション」
クロージングの前に「田舎でシュウカツ」奥谷 京子
クロージング、オリエンテーション「基調講演会を振り返って、翌日の分科会に向けて」

第 5 回サステナブルデザイン国際会議 — 分科会

12 分科会 A「ものづくり」
13 分科会 B「 風土で育む環境・空間」
14 分科会 C「文化資産を活かしたビジネス」
15 分科会 D「新しい価値観に基づいたコミュニティづくり」
16 アトラクション「山形で起きているサステナブルな活動報告」
クロージング「Destination 2011-2021 に向けて」

Report in English

17 The 5th International Conference of Design for Sustainability ; Destination 2010-2022, Reported by Andrea Mendoza

関連イベント

20 会議前日開催シンポジウム「人と環境にやさしい山形のくらしを考えるシンポジウム」
21 交流会「第 5 回サステナブルデザイン国際会議 交流会」
展示会「やまがた・サステナブル・デザイン展」

サステナブルデザイン国際会議 —Small Conference

22 #01「Smarter Sustainable Debuku ～サステナブルな街・ダビュークに学ぶ～」山崎 正人
22 #03「地方でクリエイティブに生きる・働く～生活圏の重なりが作るローカリティ— 仙台の事例」鹿野 護、小川 直人

はじめに

ディストリビューテッド・カンファレンスを目指して

今回 5 回目を迎えたサステナブルデザイン国際会議は、縁あって山形市で開催することとなった。開催日の直前には基調講演にお迎えしたミラノ工科大学のエツィオ・マンズィーニ教授らと宮城県の南三陸町と境を接する登米市周辺を視察していた。東日本大震災が起きたのは、その 2 週間後であった。

今回の震災とそれに伴う原発事故によって、サステナブルな社会とは何かという問いに対する答えの大まかな輪郭のようなものがいくらか見えてきたような気がしている。自然に対する親和性を欠いた大仕掛けなシステムのようなものがいかに脆くて、そのインフラの上に築かれた社会がいかにアン・サステナブルであるかということを、これほど多くの人々が実感することは、未だかつてなかったであろう。その不安感によって私達はその真裏にあるサステナブルな社会の確かな手触りを求め始めている。

2006 年、サステナブルデザイン国際会議を始めるにあたっては、それまで技術革新による環境効率の追求と歩調を合わせようと躍起になっていたデザインが、そのまま進むだけではサステナブルな社会の実現という最終目的地（Destination）には近づけそうもないという危機感があった。それ以前から常にテーマには上がっていた社会革新とはどのようなもので、デザインとはどのように関わるのかを知った上で実践するために、この会議は始められたと言える。

以来、多くを語り、多くの事例を検討する中で、概念的にはある程度理解できたと思いつつ、実感としてサステナブルな社会とはどのようなものかを捉えることは容易ではなかった。ところが、今年の 3 月 11 日、突然の激震に続く大津波が原発を飲み込み、東北地方から首都圏までを、闇と放射能汚染の恐怖で包み込んだ途端、いきなり目の前に立ち現れたこの不自然で不安定な巨大インフラに人々は現代文明の病理の核を見たのだと思う。同時に、この不安を取り払うことがサステナビリティへ接近する条件のひとつだという確信のようなものが生まれた。

しかし、原発は自然に生まれたものではない。それを生み出したものは止まることを知らない人々の欲望である。利便性と快適性を求め続けるその欲求は、それを叶え続ける技術と事業とが作り出すものでもある。そして、その事業は経済的な利益を生み出す構造によって支えられている。こうして欲望の連鎖とその拡大再生産が社会を危険と不安の縁へと追いやって行くのである。そのことに気付けば、デザインの向かう方向、あるいはより良い社会をデザインする方法論は定まってくるはずである。ターゲットは人の心であり、その集合としての文化である。

サステナブルデザイン国際会議は、今まで見てきた多くの事例と語られてきた多くの知見を手掛かりにしつつ、社会のフィールドに出てゆくことにしたい。形式的には従来の毎年一度開かれる会議から、日本あるいは世界各地で不定期開催されるディストリビューテッド・カンファレンス（分散型会議）へと姿を変えようと思う。その初回を今回の被災地で人々の生の声を聞くことから始めたいと考えている。

2011 年 6 月
第 5 回サステナブルデザイン国際会議実行委員長
益田 文和

■ 開催概要

名称： 第 5 回サステナブルデザイン国際会議
Destination 2010-2022

会期： 2011 年 2 月 26 日（土）～ 27 日（日）

会場： 東北芸術工科大学
990-9530 山形県山形市上桜田 3-4-5　www.tuad.ac.jp

言語： 英日逐次通訳、日英同時通訳

参加者数 : のべ 380 名（内海外より 8 名）

主催： サステナブルデザイン国際会議実行委員会
実行委員長 : 益田 文和／東京造形大学教授
実行委員 : 久下 玄／ tsug.LLC、酒井 良治、津田 和俊／大阪大学工学研究科特任研究員 萃点堂主宰、本田 圭吾／専門学校 桑沢デザイン研究所 専任教員、柳澤 大樹／ Edgy Japan

共催： サステナブルデザイン国際会議山形実行委員会（東北芸術工科大学、山形県、山形市）

関連イベント :

2011 年 2 月 25 日（金）会議前日開催シンポジウム「人と環境にやさしい山形のくらしを考えるシンポジウム」（文翔館／山形市）

2011 年 2 月 26 日（土）「第 5 回サステナブルデザイン国際会議交流会」（パレスグランデール／山形市）

2011 年 2 月 26 日（土）～ 28 日（月）展示会「やまがた · サステナブル · デザイン展」（東北芸術工科大学 1F ホール）

2011 年 2 月 28 日（月）エクスカーションツアー

2010 年 10 月 21 日（土）サステナブルデザイン国際会議 —Small Conference #01「Smarter Sustainable Debuku ～サステナブルな街·ダビュークに学ぶ～」（東京ミッドタウン·デザインハブ インターナショナル · デザインリエゾンセンター）

2010 年 12 月 18 日（土）サステナブルデザイン国際会議 —Small Conference #02「サステナブルデザイン国際会議　拡大委員会」（東京ミッドタウン · デザインハブ インターナショナル · デザインリエゾンセンター）

2011 年 1 月 22 日（土）サステナブルデザイン国際会議 —Small Conference #03「地方でクリエイティブに生きる · 働く～生活圏の重なりが作るローカリティ—仙台の事例」（東京ミッドタウン · デザインハブ インターナショナル · デザインリエゾンセンター）

※ = 後援承認当時の名称。2011 年 6 月 1 日より
公益財団法人 日本デザイン振興会へと移行。

■ 後援・協賛・協力（五十音順）

後援： 環境省、東京都、大阪府、国際機関 APO（アジア生産性機構）、社団法人産業環境管理協会、社団法人日本インダストリアルデザイナー協会、社団法人日本インテリアデザイナー協会、社団法人日本グラフィックデザイナー協会、社団法人日本クラフトデザイン協会、社団法人日本広告制作協会、社団法人日本サインデザイン協会、社団法人日本ジュウリーデザイナー協会、社団法人日本ディスプレイデザイン協会、社団法人日本パッケージデザイン協会、一般社団法人グリーンピース · ジャパン、財団法人地球 · 人間環境フォーラム、財団法人日本環境協会、財団法人日本産業デザイン振興会※、財団法人山形コンベンションビューロー、特定非営利活動法人エコデザイン推進機構、特定非営利活動法人グリーンマップジャパン、特定非営利活動法人バイシクルエコロジージャパン、特定非営利活動法人ミレニアムシティ、大阪大学環境イノベーションデザインセンター、筑波大学、東北大学大学院 環境科学研究科、立命館大学 文理総合インスティテュート、朝日新聞山形総局、NHK 山形放送局、河北新報社、株式会社ケーブルテレビ山形、株式会社さくらんぼテレビジョン、産經新聞社山形支社、株式会社テレビユー山形、日本経済新聞社 山形支局、毎日新聞山形支局、山形新聞 · 山形放送、株式会社山形テレビ、読売新聞東京本社山形支局、日本デザイン機構、グリーン購入ネットワーク、国際グリーン購入ネットワーク、ネイチャーテック研究会、国際ユニヴァーサルデザイン協議会、o2 Global Network、o2 JAPAN

協賛： 株式会社ア · ファクトリー、アミタホールディングス株式会社、株式会社イースクエア、株式会社 INAX、株式会社エイアンドシー、株式会社大風印刷、オムロンヘルスケア株式会社、特定非営利活動法人環境ネットやまがた、株式会社きらやか銀行、株式会社きんでん、黒澤建設工業株式会社、三和油脂株式会社、一般社団法人大丸有環境共生型まちづくり推進協会、高畠ワイン株式会社、株式会社丹野園茶舗、株式会社千歳建設、株式会社テトラス、出羽桜酒造株式会社、東洋インキ製造株式会社、トヨタカローラ山形株式会社、一般社団法人日本デザインコンサルタント協会、藤庄印刷株式会社、富士通デザイン株式会社、本間利雄設計事務所 + 地域環境計画研究室、特定非営利活動法人まちづくり NEXT 運動、株式会社山形銀行、新日本有限責任監査法人 山形事務所、山形農業協同組合、山形パナソニック株式会社、株式会社山形ビルサービス、株式会社山武、株式会社リコー、萃点堂、DEN&A Inc.

協力： 株式会社 HIS、パレスグランデール、東北芸術工科大学 和太鼓「太悳学生組」

■ プログラム

サステナブルデザイン国際会議　基調講演会
2011 年 2 月 26 日（土）

9:30	開会の挨拶　松本 哲男　東北芸術工科大学 学長
	第 1 部　グローバル · パースペクティブ
10:00	講演 1「現在の地球環境、世界の状況」山本 良一
11:00	講演 2「スモール · ローカル · オープン · コネクテッド〜シナリオから見えてくるネットワークとサステナビリティの持続」エツィオ · マンズィーニ
	（12:30 〜 13:30 休憩）
	第 2 部　ローカル · パースペクティブ
13:30	講演 3「山形精神文化考／東北文化ー山の形をした魂」千歳 栄
14:40	講演 4「自然と生きる〜手作りの暮らし 」ベニシア · スタンリー · スミス
	（15:50 〜 16:20 休憩）
16:20	アトラクション「サスティナブルデザインアイデアコンペ、全国高等学校デザイン選手権大会 2010　優秀提案プレゼンテーション」
	クロージングの前に「田舎でシュウカツ」奥谷 京子
17:00	クロージング「基調講演会を振り返って」
17:20	オリエンテーション「翌日の分科会に向けて」
18:00	終了

サステナブルデザイン国際会議　分科会
2011 年 2 月 27 日（日）

9:30	分科会の前に
10:00	分科会 A「ものづくり」 分科会 B「 風土で育む環境 · 空間」 分科会 C「文化資産を活かしたビジネス」 分科会 D「新しい価値観に基づいたコミュニティづくり」
	各分科会に分かれて開催 （11:00 〜 13:30　各分科会ごとに昼食）
15:30	分科会終了
	（15:30 〜 15:45 休憩）
15:45	アトラクション「山形で起きているサステナブルな活動報告」
16:00	各分科会報告
17:15	クロージング 「Destination 2011-2021 に向けて」
18:00	終了

■ 基調講演会　第 1 部 グローバル・パースペクティブ　講演 1

「現在の地球環境、世界の状況」

講 師　山本 良一 | 東京大学名誉教授

宇宙の成り立ちから 地球の生命の重さを知る

皆さん、ご存知のように、現在中国経済は大発展を遂げ、CO_2 を年間 60 億トン放出しています。その中国を追いかけて経済発展しているのが人口 11 億人のインドです。新興国が経済発展することは重要ですが、地球規模で考えれば憂慮すべき状況にあります。

私は、こうした国々でこのサステナブルデザインの考え方をもっと広げる必要があると考えています。重要なのは、認識の大転換をすることです。

まず、私達はこの宇宙、地球、生命を考え、その奇跡的な素晴らしさに気がつき、目覚めなければならないのです。137 億年前、宇宙ではビッグバンが起こり、様々な元素が合成されて星が誕生しました。その後も宇宙は一刻も休むことなく発展し続け、自らの力で複雑なものを創り出しています。その結果、太陽系に地球が誕生して 46 億年、生命の歴史は 38 億年。物質から私達のような知的生命体が出現したことはまさに奇跡です。

自身の稚拙な文明が招いている 私達の絶滅の危機

その地球上で今、生物大絶滅の危機が起きています。原因は私達人類の活動によるものです。私達の文明、経済、社会が稚拙極まりないと言わざるを得ません。

宇宙、地球、生命の歴史をよくよく考えれば、この生命に満ち溢れた私達の地球を何としても守らなければという思いに到達するに違いありません。

幸運に幸運が重なり 知的生命体が誕生した

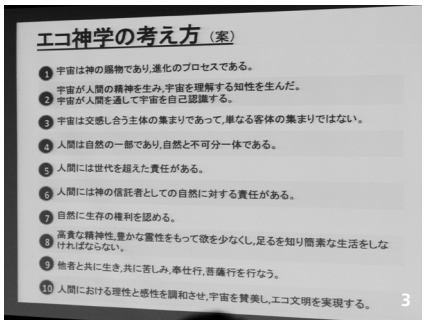
生命は幸運に幸運が重なり出現したとの考え方があります。金星のように太陽に近すぎれば熱すぎて住めず、火星のように遠ければ寒すぎて住めない。地球の位置はまさに「ゴルディロックス・ゾーン※1」にあります。そのため人間原理という考え方がここ数十年主張され続けてきました。神様が宇宙の自然法則の様々な定数を微調整しているのではないか、という考え方で、コペルニクス以来の近代科学の伝統とは対峙しています。

しかし、人間原理を持ち出さずとも宇宙は説明できるというのが、最近の科学の成果です。2 月の NASA の発表によると、1200 個の惑星が発見され、その内の 58 個がこのゴルディロックス・ゾーンにあるとのこと。知的生命体の存在は別にしても地球に似たような惑星はいくらでもあることが証明されています。また、宇宙法則そのものが知的生命体の誕生に有利にできているという理論もあります。生命の出現は必然か偶然かどちらにしても、38 億年の生命の歴史の中で地球上に 3000 万種類の生命が溢れ、物質から誕生した生命体である私達が宇宙を認識し、その神秘を語るところまできています。このこと自体が素晴らしいと私は思います。科学者である私は本来、神という概念を使いたくないのですが、今の人類、地球生命の大変な危機を前に、宇宙は神の賜物であり、宇宙は進化のプロセスであると改めて思います。

宇宙を賞賛、宇宙と調和する 生物を慈しみ、生物から学ぶ

本来、人類は宇宙の産物の 1 つであります。そして、私達人間が宇宙や地球生命を観察することは、いわば宇宙が宇宙を認識するということと言えます。これは宇宙による自己認識であり、そこには不完全性定理※2 が成立します。私達が宇宙を認識するには限界があるという結論になります。

しかし、私達には理性だけでなく感性もあります。そこで人類の総力を挙げて宇宙を賞賛し、宇宙と調和することで新たなエコロジー文明を創ることが重要と言えます。現在の工業文明からエコロジー文明に大転換することが私達の使命です。様々な宗教から持続可能性の部分を取り出すと「エコロジー神学」というものが考えられ、それに基づき、狭義



1・4 会場となった東北芸術工科大学の階段状の講堂で熱心に聞き入る参加者。2 本会議開会にあたっては、共催であるサステナブルデザイン国際会議山形実行委員会（東北芸術工科大学、山形県、山形市）委員長である東北芸術工科大学松本哲男学長よりご挨拶を頂いた。3 様々な宗教から持続可能性の部分を取り出した「エコロジー神学」。様々な宗教には、人間が自然を破壊せず調和し、うまくやっていくように伝統的な知恵が含まれている。そのエコロジー神学の価値観に基づいて我々は生産と消費をせねばならず、それにはエコデザイン原則とグリーン購入基本原則も含まれている。

松本 哲男　Tetsuo Matsumoto

東北芸術工科大学学長。1943 年栃木県佐野市生まれ。日本画家、教育者。東北芸術工科大学学長。同大学美術科教授。日本美術院理事。宇都宮大学教育学部美術科卒業。高等学校美術教諭を経て、今野忠一に師事。1968 年再興第 59 回院展にて日本美術院賞・大観賞、1989 年再興第 74 回院展にて文部大臣賞、1993 年再興第 78 回院展にて内閣総理大臣賞受賞。

の環境配慮設計や社会的な問題への配慮だけでなくて、生物多様性への配慮や、生物の様々な機能から学ぶ生物模倣などを通してデザインを見直す時期にきています。

そこでデザイナーの皆さんにして頂きたいのが 137 億年の宇宙の歴史、46 億の地球の歴史、38 億年の生命の歴史、1 万年の文明の歴史の「見える化」。これにより、コミュニケーションが促進され、工業文明からエコロジー文明への転換を加速するものと期待しています。

地獄の入口に近づいていることを肝に命じながら考える

現在、地球温暖化は加速しており、全地表面の 1 ㎡あたり 0.85 ㎡の豆電球がつけっぱなしになっている状態です。1 年間に使用するエネルギー量の 400 倍が地球の表面、陸地、海に溜まっています。これが昨年の大変な異常気象、例えばロシアでの千年に 1 度の熱波やアメリカのテネシー洲の千年に 1 度の大雨など世界各地に深刻な被害をもたらしています。

昨年、日本は猛暑で米の収穫量が激減し、このまま行けば年間 17 兆円規模の被害になると言われています。どうすればいいのかというと、世界の平均温度の上昇を 2℃以下に抑制することです。国際社会はそれで合意したわけですが、あと 1 億 2 千トンの CO_2 を放出すると 20 年後に気温が上昇し、温暖化地獄の入り口になってしまいます。このままで行けば 50 年後に 4℃を突破するかもしれない。加えて、原油価格の高騰や食糧危機、ピークメタルも指摘されています。

人類の英知に結集すれば必ず解決できる

そうした中で、私が言いたいのは問題は必ず解決できるということ。国連でも年間の世界の GDP の 2% を充当してゆけば、低炭素社会の実現は十分可能だと伝えています。約 100 兆円を投入すれば、新たな産業と雇用を創出できます。

大切なのはこれらの問題を同時に解決することです。材料科学を専門とする私はエネルギー、地球温暖化、資源などの問題を解決してそれにふさわしい持続可能な製品、サービス、ライフスタイルの実現を目指します。

そのためにはサステナブルデザインに生命を吹き込んで、地獄の入り口に近づいていることを肝に銘じながら研究開発しなければならないと考えています。

山本 良一　Ryoichi Yamamoto

1946 年茨城県水戸市生まれ。69 年東京大学工学部冶金学科卒業。74 年同工学系研究科大学院博士課程修了、工学博士。74 ～ 76 年マックス・プランク金属研究所客員研究員。78 ～ 80 年ブリティッシュコロンビア大学中間子研究施設 μSR 国際共同研究。81 年東京大学工学部金属材料学科助教授。88 年東京大学先端科学技術研究センター教授。92 年東京大学生産技術研究所教授。2010 年より、東京大学名誉教授、国際グリーン購入ネットワーク会長、全国環境ビジネス企業連合会会長。

※ 1= 宇宙で生命が存在するのに適した領域のこと。イギリスの童話「ゴルディロックスと 3 匹の熊」に由来。
※ 2=1931 年ヘーゲルが証明。どんな理論体系にも証明不可能な命題が必ず存在し、その理論体系に矛盾がないことをその理論体系中で決して証明できないということ。つまり自己で完結する理論体系は構造的に有り得ないということ。

■ 第 1 部 グローバル・パースペクティブ　講演 2

「スモール・ローカル・オープン・コネクテッド ～シナリオから見えてくるネットワークとサステナビリティの持続」

講 師　エツィオ・マンズィーニ｜ミラノ工科大学 教授、DESIS NETWORK 代表

DESIS NETWORK は、エツィオ・マンズィーニ教授が中心となり発足した社会を良くする仕掛けとそのためのデザインを振興・共有するためのネットワーク。アフリカ、ブラジル、中国、コロンビア、中東、そしてヨーロッパとアメリカにラボがあり、各地域で起こっている社会を良くするための活動や新しい動きを調査・研究している。その仕組みを理解し、さらにその研究成果を共有することで、私達の暮らしの中の課題発見とその改善へと応用を目指している。現在、その他いくつかの地域でもラボ設立準備が進んでおり、2011 年 5 月にはパリに各ラボが集まり「DESIS FORUM」が開催された。
www.desis-network.org

エツィオ・マンズィーニ　Ezio Manzini

ミラノ工科大学教授。工業デザイナー・建築家。新しいビジネスモデルの構築論に関する欧州の第一人者。サービサイジング（経済のサービス化）を提唱し EU 連合で推進される PSS（製品サービスシステム）のコンセプト立案者の一人である。サステナブル・ソリューションに関する理論体系を構築・実践している。主な活動に、「DESIS NETWORK」、「Sustainable Everyday Project（2006 年本会議で発表）」、「SEE...」などがある。

危機脱出に向けたシナリオを描く

プレゼンテーションのテーマは、地球環境の危機からの脱出戦略です。それは過去に対する修正ではなく、未来の可能性に賭けていくということです。恐竜の化石のように残存する過去から、どう未来に繋げた活動をするかについて、皆さんと共に考えたいと思います。若いデザイナーの皆さんには、危機は最大のチャンスであり、地球環境が危機に瀕している今だからこそ面白い解決策を生み出す好機であると気付いて頂きたいのです。

そうした中で私達デザイナーがやるべきことは、現実をよく観察した上で、シナリオを創ること。シナリオに基づいたプロジェクトを作り、推進力をもって実現しなければならないということです。このシナリオはアイデアとビジョンに満ちていて、これからの社会に役立つものでなければなりません。そして、サステナブルな社会の実現に向けて、一人ひとりが社会の一員として緊密に結びついてゆかなければならないのです。

サステナブル社会に向けた 3 つのトレンド

これらのシナリオは現実に起こっている社会のダイナミズム、つまりトレンドに根差していなければなりません。トレンドには大きく 3 つあり、1 つ目は「グリーン・エコノミー」、これはグリーンテクノロジーと一体となり、今ある社会の形をもう一度作り上げていくようなものです。2 つ目に「ネットワークの普及」。インターネットや携帯など移動通信機器の発達により環境は急速に変化し、私達は互いに繋がり合っていることに既に気付いています。こうした変化はアラブ諸国で爆発的な政変が起こったことからも知ることができます。移動通信の技術なしには起こり得なかったことであり、同時に社会における今までの階層的なタテの仕組みが、水平的な仕組みに変わりつつあることを示しています。これにより、これまでの市場経済からネットワークを利用した経済へと変化してきていることに気付かなければなりません。私達デザイナーの仕事は大きく変わりつつあります。今こそプロのデザイナーのメンタリティ、考え方が非常に重要です。3 つ目に、「デザインが社会の変化に深く関わっていること」が挙げられます。今後有望なのは都市の再生、貧困の根絶といった社会問題や課題に応えていく産業だと言われています。今後は社会的なことがらを手助けしていくための条件づくりを行い、1 つのプロジェクトに集約することがデザイナーの役割になるでしょう。

「分散型システム」が世界を変える

これまで私達の社会は階層的（縦型）でした。しかしネットワーク社会の到来により、人類史上初、私達はディストリビューション・システム（分散型システム）を構築しつつあります。特徴的なのはネットワークの繋がり方がすべて平等（横型）の繋がりであること。小規模かつ柔軟、高度なコンテンツの組み合わせからなる社会です。ノートパソコンはまさにその 1 つ。エネルギーシステムにおいても、恐竜のような巨大な原子力発電所に対し、水平的に送電されるインテリジェント・グリーン・エネルギーシステムがあり、情報化技術と同様、変化が起こりつつあります。分散型システムには多くのメリットがあり、今後、勝算は高いと言えます。こうした、今起こりつつある変化を現実に掴むためにデザイナーの皆さんは基本的なエクササイズが必要です。

社会的イノベーションに繋がる 4 つのキーワード

この分散化システムの中で、人々が声を上げることで社会的イノベーションが可能となります。いま何千何万という人が社会イノベーションを起こしています。デザイナーができることは、明確なシナリオを人々に打ち出していくこと、人々がライフスタイルや、考え方を変える手助けをしていくことです。

そして、シナリオには 4 つのキーワード「スモール」、「ローカル」、「オープン」、「コネクテッド」があり、デザイナーのガイドラインとしても非常に役立つと思います。このキーワードが交わるところに私達デザイナーのすべきことがあり、将来に向けた様々な考え方を構築することが可能です。市場経済の考え方では、小さいものは大きく成長しなければと思いがちですが、DESIS（Design for Social Innovation and Sustainability ＝社会イノベーションとサステナビリティのためのデザイン）の考え方ではスモールはスモールのままでいい。分散化されたシステムを考えた場合、小さなものが接続し合って大きなシステムを構成すると捉えています。新たなシナリオではスモールはもはやスモールでは有り得ない。接続の密度によって変わってくると考えています。ローカルであってもオープンな形で接続されれば文化的、政治的な意味をもってグローバルな形で広がって行きます。こうした中で、デザイナーは社会イノベーションのイニシアチブを取れる立場にあることを忘れないでください。

■ 第 2 部 ローカル・パースペクティブ　講演 1

「山形精神文化考／東北文化―山の形をした魂」

講 師　千歳 栄 | 株式会社千歳建設 取締役会長

左は曼荼羅の中台八葉院、右は山形山岳曼荼羅。山形はありながらにして、曼荼羅の形をしている。

千歳 栄　Sakae Chitose

株式会社千歳建設 取締役会長。1928 年山形市生まれ。46 年山形工業学校卒業後、明治初期から続く家業の千歳組へ。60 年専務、61 年社長。91 年に千歳建設に社名変更、2005 年から会長。山形県中小企業団体中央会会長、山形県建設業協会会長を歴任、東北芸術工科大学東北文化研究センター運営委員長、東北文化友の会会長、多摩美術大学芸術人類学研究所客員研究員、国土交通省文化観光懇談会委員なども務める。

あらゆるものに神が宿る山形の精神文化

「山形はもうひとつの日本。精神文化の魅力を発信」という山形新聞の記事があります。これは数年前、山形が誇る精神文化が広く海外に紹介された時のものです。その中には先人達の様々な知恵があり、私達が学ぶべきものが多くあります。例えば草木塔は江戸中期頃から建てられた草木の供養塔で、樹木に対する感謝、生命を頂いたことに対する供養、その生命の再生への祈りを込めて建てられたものです。山形市南部、米沢、川西、飯豊などで見られます。これらの草木塔は哲学者梅原猛氏をして「まさに日本仏教の山川草木悉皆成仏という思想を具現化したものである」と言わしめた程です。この他、山形には牛頭観音もあります。馬頭観音があるなら、牛の神様、仏様があっても良いのではないかと畜産業者が牛を供養するために建てた碑文です。石壇供養碑もあれば、梵鐘の誕生を出産に見立てた取り上げ式なる行事もあり、ありとあらゆるものに神性を見る山形の人々の信仰心の厚さを伺い知ることができます。

あの世とこの世を繋ぐ「端山深山信仰」

山形独特の信仰の形として、端山深山信仰があります。「端山」とは里の近くにあって、あまり高くない、形の良い美しい山のこと。端山に住む人が亡くなると遺体を山の下に葬ります。今の言葉でいう風葬のようなことで、魂が体から抜け、亡骸は自然に還って行く。それが「霊」となって端山の頂に昇り、端山の頂から自分の家族や親族を見守っている。遺族もその山の頂を見て、死者と語り合いながら生きる。33 年経つと端山から「深山」に昇り、そして天のあの世に行くといいます。これが端山信仰です。山形にはその名残が数多くあります。この学校の裏山にある瀧山も深山ですね。端山はここから少し北の方に行った千歳山です。天のあの世に行った霊は、正月、春の彼岸、お盆、秋の彼岸と年 4 回この世に帰ってきます。こういうふうに遺伝子のように先祖と繋がり、関わりを持ちながら人は生きてきたのだと思います。

山形の精神世界の中枢を担う「湯殿山信仰」

有名な出羽三山は羽黒山、月山、湯殿山と言っていますが、そもそもは羽黒山、月山、葉山ということで、端山深山信仰が原型となっています。また、湯殿山とは、出羽三山の総奥之院のことで、江戸時代は真言密教でしたので、大日如来と呼ばれていました。神道になってからは、ご神体と言っています。湯殿山には磐座と言われる大きな石があり、山頂からお湯が湧くという神秘性も湯殿山信仰をさらに深めたのだと考えています。日本の聖地というのは神仏習合ですから、こちらに自然の神があれば、隣に必ずその先祖の霊を祀るところがあります。湯殿山も隣に先祖の霊を祀ってあります。神と仏を一緒に祀るというのは、日本人の心の原風景です。私達の生命は、親が無ければ無い訳です。その親の命も、更に親の命が無ければ無いと考えていきますと、我々のこの生命は無限の彼方から来た先祖の生命の流れが創ってくれたもの。そうした私達の生命も、空気や水や植物や動物の恵みが無ければ一時たりとも生きられない。そのことを我々の先人は感性で、直感で考えながら、こういう信仰を持ち続けたのではないのかと思います。単純に見えて、そこには哲学的な意味がきちっとあると私は考えています。その信仰の基本は自然の神を敬うこと、先祖の霊を敬うという 2 本柱であり、これはほとんどの信仰に共通していえることでもあります。

地域の精神の流れに脈々と流れる道徳心

私はある時、「犯罪白書」を見て驚きました。凶悪犯が日本一少ないのが、我が山形県だったのです。それは決して偶然ではなく、ずっと長い間、地域の精神の流れの中に培われた道徳心の現れです。その道徳心を高しめたのは信仰心。その信仰心を育んだのはまさに山への信仰に他なりません。当時、私は密教にのめり込んでいたので、曼荼羅を見ながら手前に山形県の地図を置いてみると、鳥海・神室・御所・蔵王・吾妻・飯豊・朝日・摩耶山の山々が浮かび上がってくるのです。周囲に八山八仏があり、真ん中に大日如来がおられ、それはまさに曼荼羅の中台八葉院そのものです。山形県はいながらにして曼荼羅の形をしているということです。これが、凶悪犯罪の抑制に影響があったと考えています。

これに気付いた時、自分が生まれ育ったこの山形は、こんなにも素晴らしいのかと改めて感じました。今私達は死を敬遠しがちですが、実は死は私達の生を支えているのです。先祖、親、そして私達が食し栄養としてきたすべての植物や動物も皆、死をもって私達に生命を与えてくれているのです。私達は人間だけでなく自然のすべての死を忘れてはならない。私はそんなことを思いながら「地球は生と死、そして再生と循環のドラマの世界」ではないかと思いながら生きています。

■ 第 2 部 ローカル・パースペクティブ　講演 2

「自然と生きる〜手作りの暮らし」

講 師　ベニシア・スタンリー・スミス｜ハーブ研究家

沢山の美しい写真と共に、京都・大原での自然の恵みに溢れた暮らしについてお話をしてくださったベニシア・スタンリー・スミス氏。講演会場は、ベニシア氏のお話を聞くために集まった沢山の参加者で満席の状態になった。

ベニシア・スタンリー・スミス　Venetia Stanley-Smith

ベニシアインターナショナル英会話スクール代表。ハーブ研究家。1950 年ロンドンで生まれる。生家はイギリスで貴族の館として知られるケドルストン城。19 歳の時、イギリスを離れインドを旅する 1971 年に来日。1978 年より京都で英会話スクール、ベニシアインターナショナルを設立。1996 年、大原の古民家へ移住してハーブガーデンを作り始める。ハーブやガーデニング、ライフスタイルに関する執筆多数。広い分野の講演活動も行っている。著書に「ベニシアの京都里山暮らし―大原に安住の地を求めて（世界文化社）」、「ベニシアのハーブ便り ― 京都・大原の古民家暮らし（世界文化社）」などがある。

自分にとって居心地のよい生き方を選ぶ

今日は、「生きることがひとつのアート、life is an art」というような話をします。生きることにも上手、下手があり、私達一人ひとりが選択することができるのです。居心地の良い悪いは一人ひとり違う。我慢せず自分にとって良い方を選ぶと人生は必ず上手くいきます。

私は 1950 年ロンドンのケドルストン城で生まれました。そこは母方の実家で、ロバート・アダム氏が 35 年かけて建てた城です。私の先祖が 30 歳で建て始め、完成したのが 65 歳の時。昔の人は急がないので、結果的に良いものができます。現代人はなぜかいつも急いでいますが、ゆっくり味わって生きる方が人生は豊かだと思います。お城に住んでいると幸せかと思うと、決してそうではないんです。まず毎日何もすることがないので、買い物したり、パーティーをしたり、美食をするので肥満になってしまう。子供心にもこれでいいのかと思うようになり、ある時、村にある小さなコテージを見たときに「将来こういう家に住みたい」と思いました。私の母は生涯で 4 回結婚しました。3 番目のお父さんがジャージー島で農業を始めた際、私も学校に行きながら手伝うようになったことが、今になってハーブを育てたりすることに繋がりました。

日本との出会い、そしてインドへ

私が 17 歳のとき、社交会にデビューしなければならなくなりました。しかし、丁度ベトナム戦争の頃だったので、大勢の人が死んでいるのに、シャンパンを飲んで舞踏会というのがたまらなく嫌になり、この時から生き方について考え始めたのです。そしてなぜか日本人の書いた本を読むようになりました。福岡正信の「自然農法 わら一本の革命」や久司道夫のマクロビオティックス、ヨガの本などの影響を受けて、東洋に行きたいと思うようになりました。それで 19 歳の時に、20 ポンドを持ってロンドンのパン屋さんの車で海を渡ってシルクロードを通り、2 ヶ月かかってインドに着きました。車で行くと風景が少しずつ変わっていくので、違和感がなく、世界中どこの国も一緒だと感じました。インドでは、今は有名なプレム・ラワットという瞑想の先生との出会いがありました。彼は当時 12 歳でしたが既に素晴らしい教師でした。その時に学んだのが「今を生きる」ということ。私達はいつも過去や未来のことばかり考え、今がからっぽになっています。夢中になったら、今を生きている。だからその夢中になれることを探さなければならないのです。

京都大原の古民家での暮らし

私は日本に来て 23 歳の時に九州の男性と結婚し、13 年結婚生活を送った後に離婚。シングルマザーとして 7 年経った頃、山岳写真家の現在の夫と結婚しました。その時に家を探していて、見つけたのが今住んでいる大原の古民家です。昔の家は造りが良く、私が子供の頃から夢見ていたコテージが手に入り、本当に嬉しかったです。14 年経った今も、夫と少しずつ手直ししています。4 人の子供達や友人達も手伝ってくれます。庭を作ると、どんどん自然のサイクルを感じるようになりました。人間よりも自然の方がはるかに賢い。また、私の家にはなるべくリサイクルできるもの、古いものしかありません。プラスチック製品であるのは唯一歯ブラシだけです。

四季の移ろいを感じる、楽しい忙しさの暮らし

私の家には、エアコンや電子レンジなどもありません。薪ストーブで御飯を炊くこともあります。原始人に近いような生活をしています。NHK の番組を観て、「ベニシアはいつもボーッとしてお茶飲んでばかりいる」と思われるかもしれませんが、自分で作れるものは全部作ろうとしているから、結構忙しいんですよ。

例えば堆肥づくり。コンフリーの葉を生ゴミに入れると短期間で質のよい肥料ができます。作物を育てるには土が一番大切で、ミミズがいるのが良い土の証拠です。イギリスでは堆肥を作ることはごく普通のことで、誰でも一人でできることはやらないといけないと私は思います。忙しいけれど、面倒くさいのではなく、それは楽しい忙しさなんです。

また、大原には綺麗な川がありますが、下水道がありません。ということは私の家で使うシャンプーや食器洗い洗剤など、全部高野川に入り、鴨川から海まで行く。それに気付いた時、全部自分で作ろうと決心しました。昔の本を読んで、材料を調べてみたら結構簡単に作れることがわかり、自分の手にも身体にも良い。いいことずくめです。今はシャンプーも石鹸もクリームも全部手作りしています。そして、日課にしているのが大原の美しい風景を見ながらの散歩。私にとって生きていて一番嬉しいことは、美しい地球を見ることです。すべてが自然の恵みと思えるのです。でも、自然の恵みが分かるためには、自分の心がまっすぐでないといけないですね。

■ アトラクション

「サスティナブルデザインアイデアコンペ、全国高等学校デザイン選手権大会 2010　優秀提案プレゼンテーション」

東北芸術工科大学主催の「サスティナブルデザインアイデアコンペ」および「全国高等学校デザイン選手権大会 2010」の優秀作品をアトラクションとして発表頂いた。

寸劇スタイルのプレゼンテーションが大変ユニークで、プレゼンテーション終了後の質疑応答も、多くの方からコメント、質問が寄せられた。

1

2

3

4

5

「サスティナブルデザインアイデアコンペ」は学生に「デザインと人間」「デザインと環境」「デザインと社会」を考えたもの創りへの理解を深めてもらい、優秀な人材の育成を目指すコンペティション。2008 年より開催。「全国高等学校デザイン選手権大会」は全国の高校生を対象に「社会を良くする」ためのデザインを募集している大会（通称：デザセン）。1994 年より開催。**1** サスティナブルデザインアイデアコンペ 2008 年最優秀賞「KAMINOWA（カミノワ）」吉田 奈々さん（東北芸術工科大学プロダクトデザイン学科 3 年）。**2** 同コンペ 2009 年最優秀賞「積みばたけ」青木大輔さん、樋口太郎さん（武蔵野美術大学大学院）**3** 同コンペ 2010 年最優秀賞「みどりの波とまなぶ舟」杉山由香さん（東京電機大学 未来科学部 建築学科 3 年）**4** 全国高等学校デザイン選手権大会 2010 優勝（文部科学大臣賞）「まくら投げのすすめ」佐賀県立有田工業高等学校の皆さん。**5** 同大会準優勝「男も見守る携帯アプリ ウームメン」静岡県立伊東高等学校城ヶ崎分校の皆さん。

■ クロージングの前に

「田舎でシュウカツ」

WWB ジャパンの奥谷京子氏より、同団体がサポートしている田舎で働きたい人の興味を応援し、自立を促すための職業訓練のプロジェクトについてご紹介頂いた。

WWB ジャパン

「Women's World Banking Japan ／女性のための世界銀行日本支部」の略。女性の経済的自立を支援する目的で作られた世界的ネットワーク。1990 年より起業家向けセミナー（男女不問）を全国で展開。女性を中心に 1000 人以上が各地で起業家として活躍している。

WWB ジャパンでは、農を軸とした第 6 次産業化（第 1 次産業（農業）+ 第 2 次産業（加工）+ 第 3 次産業（流通･小売）=6 次産業）をプロデュースし、農からスタートする付加価値の高い産業づくりを通じて、研修生の自立を応援している。このプロジェクトは、産業的な意味に加え、田舎コミュニティでの仲間との協力関係づくりも目指しており、田舎同士が垣根を越えて繋がることや、新たな価値のネットワークが築かれることも目指している。戦後、都市化・効率化の中で、人々をスポイルしてしまった成長路線を修正し、自然との共生を目指す。それは同時に、人の心の再生にも繋がる。日本の再生が、経済の再生で語られている現在の日本社会に、もっと広い文化的・人間的価値からの再生を田舎から示して行きたい。
www.hatarakitai.net

■ クロージング、オリエンテーション

「基調講演を振り返って、翌日の分科会に向けて」

この日に行われた山本良一氏、エツィオ・マンズィーニ氏、千歳 栄氏、ベニシア・スタンリー・スミス氏の 4 名の基調講演を振り返ったのち、翌日の分科会に向け、各分科会ファシリテーター（分科会 A「ものづくり」植松豊行氏、分科会 B「風土で育む環境・空間」竹内昌義氏、分科会 C「文化資産を活かしたビジネス」久保雅義氏、分科会 D「新しい価値観に基づいたコミュニティづくり」益田文和）より、それぞれのテーマやプレゼンテーターの紹介があり、閉会となった。

■ 分科会 A 報告

「ものづくり」

ファシリテーター　植松 豊行 | 東北芸術工科大学デザイン哲学研究所教授 サスティナブルデザイン研究センター長

見える化・見せる化・基準化・実践

我々の分科会ではサステナブルデザインについて、ものづくりをベースに論じ合いました。4 名の方にプレゼンテーションを頂き、2 度のディスカッション、そして発表を踏まえて分科会を進めました。その中で、いくつかのキーワードが上がってまいりましたのでご紹介させて頂きます。

1 つ目は、「見える化」。使い手と作り手の信頼関係をいかに作ってゆくか。情報の透明性、トレーサビリティなどの背景を商品に反映し、見せてゆくか。いかに使い手と作り手の距離を縮めるか。これは物理的な距離も心の距離もです。IT の活用が考えられます。顔が見えることも「見える化」の一つです。現場を知ることでサステナビリティ視点で規格を見直すこともあり得るでしょう。例えば、曲がったきゅうりを規格外としない新しい規格を作ることも考えられます。

2 つ目、「見せる化」。これは、魅力の創出ということです。新しい解決方法やシステムを、どうユーザーに魅力的に見せてゆくか。サステナブルだけど格好良くないものがあると思いますが（過去の価値基準の見直しは必要あると思いますが）、ものづくりに関わる者の力量として、魅力あるものにすることができるということを確認しました。

3 つ目、「基準化」。商品開発から販売、回収、再生まで環境負荷を定量化して見せてゆき、基準を作るというものです。そうするとイメージで、コスト優位と思われているものがそうではなかったり、環境負荷などが数値でわかれば、例えば、材料の地産地消が極めて優位ということがわかります。

4 つ目。これらのことを一人ひとりが率先して、自主的にやり、ライフスタイルの新しい方向を「実践」して行くということです。

一昨日のシンポジウム（▶P20）の際、会場では、「サステナブル」という言葉を初めて耳にする方も沢山おられました。我々はこのテーマにどっぷり浸かっておりますが、知らない方も沢山おられます。

「新しい価値のライフスタイル」を、我々一人ひとりが実践し、もっと世の中に知らしめることが求められます。地域地場産業を活性化し、それを基盤にした新しい価値を作るにあたっても、伝統と同時に、サステナビリティを包括した新しいシナリオをしっかりと作ることが大切です。それが大きな課題です。

昨日の基調講演会、本日の分科会でのディスカッションを通し、一人ひとりが認識を高め、一人ひとりが問題を共有して、明日から自分ができることを行動し、多くの人にこのことを広めてゆこうということで合意し、我々の分科会を終えました。

キーノートスピーチ

青木 史郎　Shiro Aoki

公益財団法人 日本デザイン振興会 常務理事

「これからのものづくり」

グッドデザイン賞の中に「サステナブルデザイン賞」を設立した経緯や、工業デザイナーの秋岡芳夫さんから学んだ暮らしのデザイン、使い手と作り手の関係が見えるものづくりなど、ローカルなものづくりから見いだされる新しい価値についてお話頂いた。

プレゼンテーション 1

菊地 規泰　Noriyasu Kikuchi

株式会社菊地保寿堂 代表取締役

「地域に於ける伝統を活かした新たな価値感創出活動、菊地宝珠堂の取り組み」

ご家業である 400 年の伝統で育まれた山形鋳物を例に今後の伝統産業の在り方について、家族経営のメリットと課題など、大変有意義なお話を頂いた。

プレゼンテーション 2

加藤 公敬　Kimitaka Kato

富士通デザイン株式会社 代表取締役社長

「グリーン・イノベーション・デザイン」

企業の社会貢献活動の中にすべてが凝縮される形で、「情報」「コミュニケーション」「技術」の 3 本柱による富士通デザイン社が取り組むべき活動をご紹介頂いた。どのように「見える化」「見せる化」するか、どのように社会に提示してゆくかが、デザインの大きなミッションである。

プレゼンテーション 3

木下 洋二郎　Yojiro Kinoshita

コクヨファニチャー株式会社 デザイン室 室長

「コクヨの間伐材事業 国産材の可能性を求めて」

1999 年から間伐材の家具を発表するなど先進的取り組みを進めている同社。国産材利用促進のためには、美しい木をきちんと美しく見せること、森林の手入れをすること、そして森林地域全体の連携を大切にすることが重要とのお話を頂いた。

ファシリテーター

植松 豊行　Toyoyuki Uematsu

東北芸術工科大学デザイン哲学研究所教授
サスティナブルデザイン研究センター長

前パナソニックデザイン社社長。公益財団法人日本デザイン振興会理事。京都造形芸大学、多摩美術大学大学などにて ID 並びに事業·商品開発を担当。サステナビリティを基盤に発展と親和性のある事業 · 商品開発を研究。

■ 分科会 B 報告

「風土で育む環境・空間」

ファシリテーター　竹内 昌義 | 東北芸術工科大学 教授

キーノートスピーチ
本間 利雄　Toshio Homma
本間利雄設計事務所代表

「風土と建築　山形での活動」
70 年代日本列島改造論の進む時代に出会ったイアン・マクハーグらの影響から、早い時代から生態系的アプローチを建築に取り入れられたことについて、また、建物だけに留まらない全体の環境の中でものを作ってゆくことが風景を作ることであるというお話を頂いた。

プレゼンテーション 1
大山 由美子　Yumiko Ohoyama
株式会社丹青研究所 取締役

「エコミュージアムと生活環境の創造」
地域全体を住んでいる人ごと博物館にしてしまう「エコミュージアム」の考え方を「コウノトリ翔る地域まるごと博物館」を例にお話頂き、地域の変化について紹介頂いた。

プレゼンテーション 2
エマニュエル・ムホー　Emmanuelle Moureaux
東北芸術工科大学 准教授

「Shikiri 色切」
日本の風景に見られる空間が重なってゆく様子や、抜け感が持つ魅力、豊かさについて、お話を頂いた。パリでは見られない、鮮やかな色が散りばめられた風景により色に敏感になり、それを作品に反映するようになったとのこと。

プレゼンテーション 3
三浦 秀一　Shuichi Miura
東北芸術工科大学 准教授

「山形の森林農村の現状と課題」
山形の風景は本当にユートピアか? 山本先生がおっしゃったような地獄（▶P6）ではないにしても、本当にそうか? をデータとイメージで解析。衣食住、雇用、エネルギーなど、実は全部繋がっている。我々はそういったものを全部を扱い、全体を見なければならないというお話を頂いた。

ファシリテーター
竹内 昌義　Masayoshi Takeushi
東北芸術工科大学 教授

1962 年神奈川県生まれ。みかんぐみ共同代表。建築、家具、都市デザインなど空間造形に関することが専門。馬場正尊、三浦秀一、山畑信博、渡部桂との共著に「未来の住宅カーボンニュートラルの教科書」がある。

人間を踏まえた生態系としての地域、風土

僕らの分科会では、各プレゼンテーションの合間にその都度ディスカッションを挟む形式で進行いたしました。

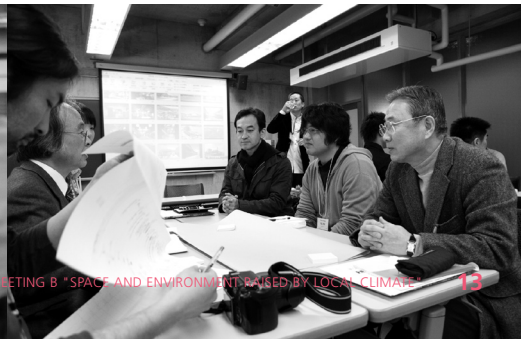
本間先生からのプレゼンテーションを受け、先ずは「地域を活かすとはどういうことか?」「風土とは何か?」というディスカッションをしました。「自然や社会そのものをデザインに活かし」、「思い出に溶け込み、人間の感情に訴える風景を大切にすること」が地域を活かすことであり、「意識していないが、帰ったときに感じられる安堵感」が風土という話がありました。「長い時間と思い入れが積み重なってこそ、地域の風景を活かすことができる」という話をいたしました。

大山さんのプレゼンテーションを受けてのディスカッションでは、「どうしたら良い合意形成ができるのか?」ということを話し合いました。それには、行政だけでなく住民自身にも参加している意思がなくてはいけない。理解や協力、地域を守る思いやりが必要という話になり、どういうふうにそれを築いていくかという話をしました。なにげなく目にしている地域の風景を守るにもメンテナンスが必要で、それにはお金もかかるということを知ってもらわねばという話になりました。

最後に、エマニュエル先生、三浦先生のプレゼンテーションを受け「これからの地域ビジョン」についてディスカッションしました。4 つのグループの発表を簡単に紹介します。

山形まるごと博物館：自分達も楽しめ、県外に誇れるような、サーカスのようなイベントの博物館を作っては。
現実的未来の共有：現実的に衰退していく未来を提示し、皆で共有することで、はっきりとしたビジョンを芽生えさせる。
コミュニケーションのレイヤーを重ねる：コミュニティがもっと繋がり、コミュニケーションのレイヤーをより重ねることで、衣食住をコンパクトにしてゆく。
グローバルからローカルへ：貨幣経済に乗りきるのでなく、ボランティアなどで相互付与をしながら地域を守ってゆけばいいのでは。

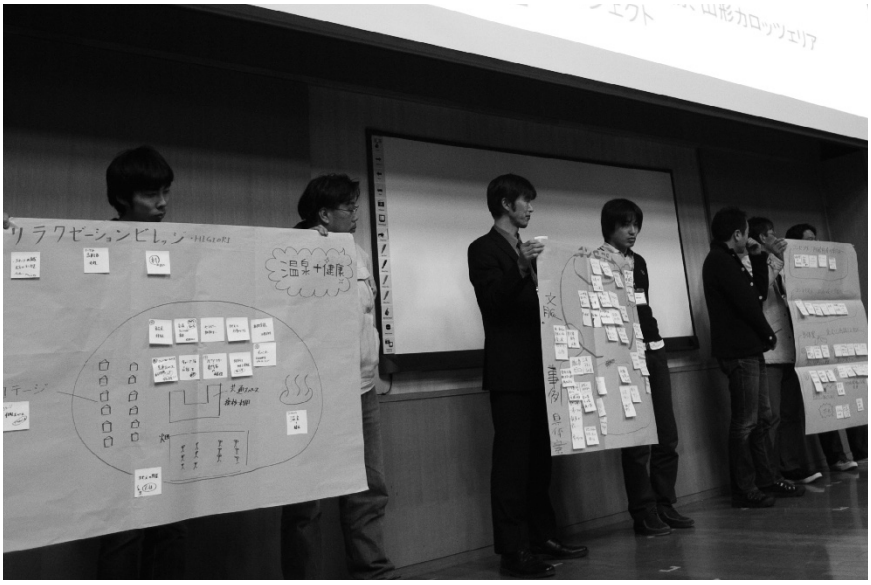
バラエティに富んだプレゼンテーションの後に、皆で話し合った中で印象的だったのは、行政や経済に頼るのではなく、コミュニケーションの在り方やボランティアで何とかしようということが話の中心にあったことでした。私達の分科会は山形の方が少なく、そういった方と話し合う機会が持てなかったのは大変残念でしたが、そういうことを官民学が一体になり話し合ってゆければ、未来はあるのではないかと感じました。



■ 分科会 C 報告

「文化資産を活かしたビジネス」

ファシリテーター　久保 雅義 | 京都工芸繊維大学大学院 教授



地域の素養を見直し、自分自身が地域のことをもっと考える

私達の分科会はキーノートスピーチ、グループ討議、ランチョンミーティング、各プレゼンターの発表、再びまとめのグループ討議という形で進行しました。文化資産とは、「歴史資産」「芸術文化資産」「先端・伝統技術資産」「産業」など。実際に、山形の文化資産として認知されているものは、サクランボなどの農作物や映画「おくりびと」、歴史的人物、観光地などが上がりましたが、もっと素養の部分、自然や特産品、工芸といった部分を見直すディスカッションをし、そこから各グループ、ビジネス提案をしました。

チーム窓際：20 年後が地獄（▶P6）になっていては困るから、20 年後も残るビジネスを考えようということで、私達のチームでは、山形にある「かみのやま城」を活用し、自給自足を学べる学校を提案しました。子供も大人も一緒になって野菜作りを体験し、食べる。かみのやまは農業が豊かです。土地に住む技術を持っている人が教え、田畑も活用してゆき、コミュニティ全体にメリットのあるビジネス展開をできればと思います。かみのやまの人口増加にも繋がればと思います。

チーム真ん中：山形のアピールポイントについて話し合ったところ、県の内外の方で持っているイメージやアピールしたいところが大きく違うことがわかりました。山形全体のイメージ作りも大事だが、各地域の個性も大事にしたい。共通認識として「ちょっとおせっかい」が山形の良い所という意見があり、そこを利用した提案をしました。山形では滞在費 0 円（ホームステイ）、お土産も 0 円（お裾分け）という提案です。こうすることで、県内の目的地以外にも足を延ばしてみたり、山形から帰った後も山形のものを買おうという、山形ファンを増やせればと思います。

チーム通路側：私達はリラクゼーション・ビレッジを提案しました。限界集落の廃校を利用した温泉で健康を取り戻す施設です。中高年の人生に疲れた方々を対象とし、都会の喧噪を離れて中長期的に滞在し疲れをリセットする現代の湯治場。NPO を立ち上げ、地元の若者を雇用し運営、また、食事も地元のおばさんをパートで雇用し、地産地消の郷土料理のビュッフェに。温泉の他にも、地元の農業を手伝い体験するカルチャースクールを開いたりも考えられます。できれば若い人達にも来てもらい、田舎の良さを実感し、なおかつ定住して地元文化の継承の担手となっていってもらえればと思います。

この発表の 100 倍以上、参加した皆が地域のことを考えたことが大きな成果です。

キーノートスピーチ
谷口 正和　Masakazu Tabicguchi
株式会社ジャパンライフデザインシステムズ 代表取締役／一般社団法人日本デザインコンサルタント協会 観光・街づくり担当理事

「文化資産を活かしたビジネスについて」
ものを所有価値（個人財）から使用価値に替え社会の財産（社会財）へすること、また、「お客様第一」の精神はどのようなものか、「ホームカスタマー」「メディアカスタマー」「ツーリストカスタマー」の 3 区分から丁寧にご紹介頂いた。

プレゼンテーション 1
柚木 泰彦　Yasuhiko Yunoki
東北芸術工科大学准教授

「大館曲げわっぱとデザイン」
伝統工芸である大館の曲げわっぱとデザインの事例についてプレゼンテーションを頂いた。後継者不足や材料不足（通例樹齢 200 年の樹木を材料としている）が起こった場合など、課題に対するケーススタディを伺った。

プレゼンテーション 2
澤登 信子　Nobuko Sawanobori
株式会社ライフ・カルチャー・センター 代表取締役

「森林から生み出される ソーシャルビジネス」
林業を例にソーシャルビジネスについてお話頂いた。収入が期待できる小規模林業、生活習慣病予防となる林業体験、誕生日の記念植樹など、社会資源としての林業の可能性をご紹介頂いた。

プレゼンテーション 3
平林 千春　Chiharu Hirabayashi
東北芸術工科大学教授

「東北の資源を活かす地域デザイン」
産学協同で開発しているデザイン事例をご紹介頂いた。デビューしたばかりのお米「つや姫」を用いたお米のパスタ、お米の油など、東北をマーチャンダイジングし、物産品の開発やブランド創出、まちづくりの事例をお話頂いた。

ファシリテーター
久保 雅義　Masayoshi Kubo
京都工芸繊維大学大学院 教授

松下電器産業株式会社（現パナソニック）にて海外向け商品の開発、デザインや、パナソニック社 CI 構築などに関わる。2005 年より京都ブランド推進特別委員会専門部会委員などを歴任。2004 年より現職。

■ 分科会 D 報告

「新しい価値観に基づいたコミュニティづくり」

ファシリテーター　益田　文和 | 東京造形大学 教授

キーノートスピーチ
Ezio Manzini　エツィオ・マンズィーニ
ミラノ工科大学教授

「Design as Catalyser（触媒としてのデザイン）」
世界では既にいいニュースが沢山起きていて、沢山の人が色々な社会イノベーションを起こしつつある。その主役は「アクティブなコミュニティ」。デザインはそれを促し、社会イノベーションが広がってゆくことを手助けする触媒となる、というお話を頂いた。

プレゼンテーション 1
安藤 竜二　Ryuji Ando
ハチ蜜の森キャンドル

「ハチ蜜の森キャンドル」
ご自身の営む山形県朝日町の蜜ロウソク工房についてご紹介頂いた。自然の森が育むハチ蜜の副産物として採れるミツロウから作られるキャンドル。キャンドルを通し、森の豊かさを伝える体験教室もなさっている。

プレゼンテーション 2
佐竹 勝男　Katsuo Satake
上郷花畑組合

「上郷花畑組合の取り組み」
上郷地区の棚田のお米や野菜を材料に、廃校を利用した施設でお惣菜作りをしている。グリーンパートナーシップ事業を活用し、仙台・大手町の方々へ本当に望むものを提供している。特定の生産者と消費者が手を結ぶコミュニティトレードの事例をお話し頂いた。

プレゼンテーション 3
吉田勝信　KatsunobuYoshida
じゃぽんデザイン事務所

「じゃぽんデザイン事務所」
余った野菜を売る「やおや」、廃校になった小学校でのカフェや暮らしの文化を継承する様々なワークショップ（絹のマフラー、紙すき、味噌作りなど）のお話を伺った。それらをひとつの仕組みとして考え、取り組んでいる。

プレゼンテーション 4
Andrea Mendosa アンドレア・メンドザ
DESIS Network

「世界の DESIS の活動報告」
社会イノベーションで重要なのは「信頼（trust）」と「お互い様（murual）」の感覚。DESIS Japan 設立のため、日本を紹介するために作成した CM をお披露目して頂いた。

既にいいニュースが沢山起きている

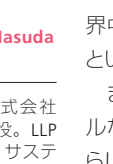
私達の分科会では、キーノート、4 つのプレゼンテーションがありました。先ず最初に、キーノートとして前日の基調講演でもお話くださったエツィオ・マンズィーニ教授（▶P8）から「Design as Catalyser（触媒としてのデザイン）」というお話頂きました。

世界では既にいいニュースが沢山起きていて、沢山の人が色々な社会イノベーションを起こしつつあるということ。そして、その主役は「アクティブなコミュニティ」だということです。ファーマーズ・マーケットや共同購入、都市農園、都市緑化（アーバン・ガーデン）など、色々な動きがあります。その中にはお祭りや、レストランもありますし、高齢者と学生が一緒に住むことでお互いにメリットのある暮らし方があったり、お家で子供のお世話をする託児所のようなことも起きています。

そこで必要なのは、4 つのクオリティ（質）。「質の良い人間関係」、「質の良い時間」、「質の良い空間・居場所」、「質の良い自信」。そして、重要なのは、そこでデザインがどんな役割を果たすかということです。デザインの役割には 2 つあります。ひとつは、ある事例をプロトタイプとし、次々に展開して、応用させてゆくこと。もうひとつは、それら事例によって相乗効果が生み出されてゆく仕掛けづくりということ。例えば、とある「コ・ハウジング」事例を、他のケースに適用したり、そこから学んだことを応用してゆく。あるいは自転車のようなものもあります。最初は自転車を貸し借りし管理するという形でしたが、今では、もっと利用しやすい事例が出てきています。また、そういった仕掛けが動き出すと、サービス・システムを作るだけでなく、結果的には様々な新しいプロダクトも生まれてくるということをおっしゃっていました。

デザイン学校などの教育機関が、そういった社会イノベーションのエージェントになってゆくというのがマンズィーニ教授の DESIS NETWORK のビジョンです。DESIS は今、世界中に拠点を持ちながら、組織化されているというお話を伺いました。

また、3 名の方からの、山形県でのローカルな活動も伺いました。一つひとつ大変素晴らしい活動で、私達も後はやるしかない、ということで解散いたしました。



ファシリテーター
益田 文和　Fumikazu Masuda
東京造形大学 教授

1949 年東京生まれ。株式会社オープンハウス代表取締役。LLP エコデザイン研究所 所長。サステナブルデザイン国際会議実行委員長。（詳細▶P16）

■ アトラクション

「山形で起きているサステナブルな活動報告」

様々なサステナブルな活動が山形県でも起きている。山形発のサステナブルな技術開発、暮らし方の提案、文化の伝承について、3 名の方からご紹介頂いた。

1 東洋インキ製造株式会社 マーケティング部の武田一孝氏より「ライスインキの開発について」のプレゼンテーションを頂いた。大豆油でインキができるんだから米ぬか油ではどうなの? というある顧客の方の一言から開発が始まった「ライスインキ」。日本人の主食である米の廃棄部分「米ぬか」の油を原料のひとつとして、これまでのインキに比べ輸送マイレージの低減、地産地消の推進、食物の確保、廃棄物削減など様々なメリットが見込め、今後の普及とが期待されている。
www.riceink.jp

2 東北芸術工科大学 三浦秀一准教授による「山形エコハウス」のプレゼンテーション。「山形エコハウス」は、山形県が環境省の補助を受け、東北芸術工科大学と連携し、平成 22 年に建設したモデルハウス。「木で家をつくる」、「住宅を省エネルギー化する」、「自然のエネルギー（再生可能エネルギー）を使う」の 3 つをコンセプトに低炭素社会における未来形住宅の具体的な姿を追求し設計されている。
www.tuad.ac.jp/adm/architecture/topics/014/

3 映画監督・渡辺智史氏によるドキュメンタリー映画「よみがえりのレシピ」のプレゼンテーション。山形県には現在約 150 種類もの在来作物が確認されている。在来作物とは「ある地域で、世代を超えて、栽培者自身によって種苗の保存が続けられ、利用されてきた作物」のこと。食用としてはもちろん、地域の歴史や文化、知恵を伝えるメディアの側面も持っている。この映画では、それら在来作物とその種を守ってきた人々の姿を捉え、紹介している。
www.y-recipe.net

■ クロージング

「Destination 2011-2021 に向けて」

サステナブルデザイン国際会議実行委員長　**益田 文和**｜**東京造形大学 教授**

本サステナブルデザイン国際会議は、2006 年より、サステナブルな社会づくりにデザインで貢献することを目的とし、開催してきました。今回の第 5 回会議では、「ローカル・サステナブル・コミュニティ」をテーマに開催し、山形に限らず、それぞれの地域が持つ固有の条件を活かし、多様性に富んだ、文化や独自の風土などを再現してゆくこと、また、地域に根差したコミュニティや産業、暮らしが守られることが社会のサステナビリティの原点であることを見つめ直しました。今回のこの会議で発表頂いた沢山の事例一つひとつが本当に素晴らしく、益々活動を続けて頂きたいと思います。

さて、その一方で、社会全体として、この 10 年間でエコデザインや環境問題が活発に議論され様々な活動がなされてきてはいますが、実際に社会が変わったという実感が薄いのはどうしてなのでしょうか。日本は海外に対して自信を持って発表すべき材料を失ってきており、技術的品質については今でも強みを発揮しますが社会の問題になるととたんに発言が少なく、国内でのみ議論をしていても世界の状況がよくなるとは思えません。

第 6 回からはローカリティを大切にしつつも、グローバルな視点を取り、サステナビリティという観点でアジアの各国が抱えている問題、課題と、各国が大切にすべき文化的財産を持ち寄り、アジアのサステナビリティについてじっくり話し合う場を作っていきたいと思います。おそらく、アジアには我々の求めていることの多くが既にあるので、それが失われない内に見据えておきたいという希望もあります。

第 7 回はタイのバンコクに会場を移し第 6 回の議論を通して見えてきたテーマをアジアを始め各国の参加者、全員で考えるワークショップを開催したいと思っています。地球環境問題への取り組みは、社会、経済、政治問題の解決を通して行われなければなりません。サステナブルな社会を構想し、無理のない暮らしができる社会の実現を目指したいと思います。

益田 文和　Fumikazu Masuda

1949 年東京生まれ。東京造形大卒業後、国土建設、デザインオフィスを経て 1978 年よりフリー。その後 frogdesign デザインディレクターを務め、1991 年株式会社オープンハウス設立。製品デザイン開発や地域産業のデザイン振興、また、エコデザインやサステナブルデザインに関する国内外のプロジェクトに関わる。東京造形大学デザイン学科教授。LLP エコデザイン研究所代表。o2 Japan リエゾン。公益財団法人日本デザイン振興会理事。一般社団法人日本デザインコンサルタント協会理事。各媒体への執筆など多数。
www.openhouse.co.jp　www.ecodesigninstitute.com

REPORT

The 5th International Conference of Design for Sustainability; Destination 2010-2022

by Andrea Mendoza

"A truly brave man is ever serene; he is never taken by surprise; nothing ruffles the equanimity of his spirit. In the heat of battle, he remains cool; in the midst of catastrophes he keeps level his mind. Earthquakes do not shake him, he laughs at storms. We admire him as truly great, who, in the menacing presence of danger or death, retains his self-possession..."

Bushido, the soul of Japan
Inazo Nitobe

The following text was written before the trilogy of events that hit Japan on March 11th 2011. I wonder if the text is still valid.
Is it still worth writing a report on how sustainability is perceived by scientists and their case studies in Japan?
If we are to look to the roots of Japanese behaviors, to the roots of their ancient and deep culture, roots that were unfolded and exposed to us all by the presenters, the roots that make them a balanced and courageous nation, I would say yes. It is worth writing it.

Before starting to write the memories of the event, I had written a preface using food as a transversal element, not only as a narrative resource but also because food is one of the most important issues to tackle if we are to talk about sustainability and in Japan, they are way beyond in terms of food culture.
The original text was then entitled: Food for Astronauts; a title wanting to recall the limits of resources with which astronauts have to deal on daily basis once they are confined in a spaceship. Limits and behaviors related, that can give us hints on a limited planet.

I write these words, under a certain state of shock because 2 weeks before the Earthquake we were all there, in the Sendai region. I have not wanted to see images and saturated TV news, I just hope and I'm very confident in what I learned about Japan during my stay there: Japan is a nation of Sailors. Meaning: a nation of strong people, capable of facing the utmost strong storms to reach their destinations; nomad people, resilient warriors, with the unique capacity of start from scratch.

My deepest respect to all of you.

Food for Astronauts

The word "destination" sounds like a final point, but as many authors, philosophers and even mystics have said it: what matters is not to reach a given place but to walk the path that leads to it.

Now, it looks as if Japan's destination were... in another planet. This because of various reasons, which move from their technological development and eco-efficiency to the highly elaborated, compact and refined food that they eat, somehow similar in size, nutrients and look to the encapsulated one of astronauts.
Besides all this, they seem to be ready to inhabit another planets because of the way in which they relate to themselves, to nature and to others within a very "tiny" space. These factors seem to talk about: evolution.

Japanese people seem to be connected to a source of primal energy coming from a nature that embraces them all, at times in a very shaking way.
Let us remember that this is an Island or better an archipelago where they have experienced strong typhoons, volcanic eruptions, tsunamis, winds, earthquakes, and what is remarkable again, is the total lack of resentment from the Japanese nation, they simply start over from scratch, over and over again.
These circumstances have made of them a really resilient nation, they know how to loose it all and start again, maybe that is why they are so sober, their spaces are small just with what's necessary for living, and in the past the wooden structures (which many times were victims of fire) could be evacuated easily without having to take much belongings, just a small bag hence in the traditional Japanese house there were few things besides the Tatamis, to loose.

Japanese people are careful then not only with nature, but also in their manners, they are caring and courteous with the space that the other inhabits. They can manage to dwell, eat and work in the same place, but not on an isolated cell, they do this with others. At the same time, they are "cold" enough to control emotions and situations. Do all these factors talk about sustainable ways of living?
If sustainability concerns better dwellings, the Japanese nation is ready to go to other planets because they can coexist, altogether in a small and resource-limited piece of land.

Now, just as astronauts gazing at our planet, Japanese people have a very high capacity for wonder, they get amazed by beauty and natural phenomena every time they see the "sacredness" that it embraces. Even in the middle of a forgotten forest, there is a "gate" that marks the entrance to a holy space. A space where they reverence a given natural element, being it: fire, water, wind, earth or the ether.

As for the mere design viewpoint, it would not be surprising that their spacecraft to migrate to other planets was manufactured using fine rice paper and bamboo (just like the outstanding Japanese Pavilion exhibited at the EXPO Hannover in Germany 2000). Maybe some gentle robots would also come along to company the immigrants with slow and sweet voices caring about every single detail and making a bow as today all stewardess use to, being it in trains, airplanes, on even at the track field of airports ... a pilot friend told me that when a plane takes off or lands in Japan, the Japanese crew: "makes a bow to greet the plane".

Currently, the Japanese nation has bowed in front of 3 events. But I'm confident in their wellness hence they are, as bamboo: extremely flexible and light to reach their next destination.

-Until here the text on food. I hope that the text below can also "nurture" the conversation on sustainability and design-.
Mini Preface
This report does not intent to be a summary of all the interventions presented at eh Conference, since the digest in which this text is included already does it; rather, the report aims at:
1. Highlighting some of the ideas of the keynote speakers.
2. Sharing ideas around social innovation and sustainability, understanding social innovation as a process made out of interconnected practices that promote: trust.

Memories

The Conference started with the opening words of Rector Tetsuo Matsumoto, principal of Tohoku University of Arts and Design, with his kick off speech, he not only created the appropriate atmosphere inside the venue but also invited us to get immersed into the Yamagata mood and surroundings. A land of ancient culture and deep-rooted sustainable practices; his speech, rather poetic allowed the "ship" to take off.

The following speaker was Professor Fumikazu Masuda, who emphasized the importance of the local in relation to the issues of sustainability and community, a relation that talks about space since time, as he asserted, is relative. He underlined the sense of the conference's concept along all its editions, given that from the very beginning all guest and participants were/are to look forward to the future, a future that was set as 2022 and that gets closer each time. A future where it is important to acknowledge that the years will meet and that it is important for each one of us to keep into perspective our personal and common goals and from this to know which kind of society is the one that we envision.
At that moment, Professor Masuda introduced a socializing exercise in which participants were going to be asked about their destination:
"Which is your next destination"? Was it entitled and aimed at getting answers from the participants regarding their views on their own future.
A short video with their answers was edited.

First-day; Keynote speeches
"Latest status of the Earth"
by Prof. Ryoichi Yamamoto

The first key note speech was given by Professor

Ryoichi Yamamoto - Professor Emeritus at the Institute of Industrial Science in Tokyo University. His speech questioned how to move from the current state of "damage" of the planet.
Prof. Yamamoto asserted that to move from there, we will have to become aware of all the living species inhabiting the planet, not just humans.
His speech was rather optimistic since he thinks that all the hindrances can be overcame if we think about a low carbon economy and economic sustainable growth meaning, a green growth.
Finally, he invited the audience to pay attention to the Universe and its evolution, to see how from chaos and the big bang, a new creation was brought into light. All this accompanied by amazing images of far galaxies.
He then invites us all to live beyond our anthropocentric slant acknowledging that there are billions of planets where life, as the human one we know could spark.
All this in a rather religious framework that help us to see how we are all part of the same creation, how religious practices should help to integrate us with nature and co-exist, to acknowledge that we already an accumulated wisdom and thus are responsible for the actual state of the planet.

■ "Small, Local, Open, Connected; The emerging scenario of the age of networks and sustainability" by Prof. Ezio Manzini

"Nowadays, a whole world of social actors is designing without us, so our role is help them to design".

According to Professor Manzini, crisis is the beginning of something new. With this statement he started building up on what Prof. Yamamoto has said, this to give continuity to a possible conversation among them.
In his speech he stated that a designer should not only be conscious of its surroundings, as Prof. Yamamoto proposed, but also be optimistic and active inside such surrounding, a professional able to understand that: "the word is in such state that there is not time to be pessimistic".

In short, he started by acknowledging that danger and change are two sides of the same coin. So he proposed some strategies to exit the crisis such as:
1. To fix the past
2. To build on the potentiality of future emerging scenarios.
Opting for strategy number 2., scenarios can be elected not as utopias, not as dreams, but as sets of values telling that something could be done if, designers could translate those into projects. This means: to observe the reality and see, which are the forces that organized, could become real.
This translation comprises also the fact that if we are to give a vision that could feed the social conversation on the future, as designers we need to move towards sustainability; we need millions of people moving in a direction that has to be coherent; we need among the tremendous lack of vision on the future, to tell billions of people that it is possible to bring us collectively, massively to do something that lead us to sustainability. That something has to be based in something that is happening today and that we are being able to recognize as deep trends.

According to Prof. Manzini, there are three main trends that can be traced:
_The trend to work towards a green economy where green technology can reshape the overall system acknowledging that the cost of the environment is not zero.
_The p2p trend, or to use interconnected technologies to generate a totally different environment for our species, things like wikinomics, de-mediated interactions, small networked enterprises, etc. This implies a change of connectivity for human beings understanding that today an incredible success of some kind of new economy not so far known is happening because of the net.
_The third trend is reshaping our society and our way of being a designer. And here it is important to clarify that in the past we used to generate goods and artifacts whereas today, we need to talk about the technology of the future as what is related to healthcare, social cohesion, poverty eradication, etc. The industry of the future is in helping to solve huge social issues.

The economy of this big challenge according to Prof. Manzini, is not just a marked economy because today, if design is related to mobility this is not just referred to cars but to a complex set of variables dealing with moving people around the city. Therefore, the economy of redesigning mobility involves also local public institutions, parking lots and the attitude of people saying that it is good to go by bike.
This is not bringing us to a rosy perspective but bring us to the material ground where we have to step in order to say that is the best direction and from there we are able to recognize something that is happening and that moves from here towards what we judge it's a positive exit.

At that point of the speech, Professor Manzini talked about the relevance of seeing a whole set of emerging opportunities that need to be understood among the quantity of trends and consider which are the more pertinent.
Here we can talk for instance about distributed systems, which is the technical name for opportunities where the architecture change goes from a vertical hierarchical direction to a bottom up one. In short, today we can organize large and complex systems in a totally different way. And it's represented by the network.

Now, those changes that Prof. Manzini talks about are capable of changing the overall system in a distributed system, even if the "dinosaurs" of the past are in big fight dispatching the energy in a vertical way.
Now, to face them, there are the technologies of today, and there is a way in which functions can change, for instance, we can create power stations where the energy is produced everywhere in the net and connected and distributed to others thanks to an intelligent grip. This redistribution will win because there are too many advantages at social, economic, etc., levels. In short here he was talking about not of POP (Point of Purchase), as usually happens for products, but about production points of use PPU, or better, a system in which things will be produced just in situ, where you need them.
If we put all that together, we have a distributed economy.

Now, the distributed systems are highly resilient organizations and to empower them, we need to build socio-technical structures that help without collapsing.
The vertical sometimes could appear thought but are fragile, if something happens to the big elements it falls down. For example, for the normal distribution of food, if the transport sector collapses, in 3 days we have not food anymore, whereas under the new food systems there is a totally new light: local distributed food production, which is more resilient.

Finally, Professor Manzini summarized the Emerging Scenarios on four keywords:
Small, Local, Open and Connected: SLOC. Where it is almost logic that small and local go together, but where the small and the connected challenge the normal stream, the main ways and thoughts that states: the bigger, the better.
Like that, with the distributed systems the small and connected allows us to have huge programs based on interconnection. In the new scenario, the small can remain small but be connected to the system and with that, it can change the world.
Like that, the small is not small, is a dot in the net; its "size" depends on the density of the links.

As for the local and the open, let us see which are the possibilities to be diverse to other villages and to be connected to others, be very local but also open to others is a cultural and political big challenge.

Professor Manzini concluded saying that nothing is a project if you don't say who will be the major driver of this change and here, and in his view that driver are people themselves.
In the view of the distributed economy, there is the possibility of giving voice to people that can change the reality and that possibility is called: social innovation. Those are the good news.

To see examples and concrete cases of this social innovation, he invites us to visit: www.desis-network.org and www.sustainable-everyday.net.

■ "TOHOKU AREA CULTURE: The Soul-mountain figure" by Sakae Chitose - Chairman of CHITOSE Kensetsu CO LTD. Spiritual culture in Yamagata

The afternoon session started with Mr. Sakae Chitose and his presentation on regional tourism and how Yamagata culture is understood.
He shared the views of the Japanese Ministry of Tourism and how they concluded that the region was worth sightseeing and thus started to look at European examples to develop the region in touristic basis.
The main focus of this presentation was the spiritual culture of Yamagata, touching the topic of the self-mummified monks that inhabited the region. The idea of the ministry then is to present the many things that can be learn form ancient Japan.
For instance, Japanese people used (or use) to think

that they see the divine in whatever form of life. This animism or seeing life in every single expression of life, allows them to, for instance, commemorate grass and trees when those are sacrificed by building up a new highway, commemoration in these cases include the building of shrines or places to materialize the ancient beings.
Along his speech Mr. Chitose widely talked about different ceremonies such as the one of the Hayama mountain (at the top of the mountain people can meet and talk to their beloved ones once they pass away) and also about Japanese divinities related to animals, showed us pilgrimage places, stupas, statues, different rituals to commemorate other events such as births, etc.
Finally, we saw a series of pictures of sacred places that usually are not photographed; places where, according to them, souls actually fly because they cannot walk.
His message then was that we are alive, we all belong to a network where parents are important, otherwise we would have not been born, so there is a grand flow of ancestors interconnected, everything is alive and without them life cannot be supported. A thought shared by all religions, especially among people with Asian thought.
African Indians, Maoris and aborigines from Australia have thought it, thus we have to remind ourselves that we are of a part of circulating/flowing nature.

For the rest of the interventions, the best thing would be to go along the papers written by the authors/presenters; nevertheless, here some of the highlighted phrases heard this afternoon:

"_People in Yamagata region has high standards of moral and, consequently, the criminal rate is, statistically, low_ food which is coming from the death of many things, thus, supporting the live of other and all nutrients in it is supporting life _we should first start with death since from there live appears _God is in inside of each one of us _ pain will save you in the end _establish a serious relationship with others, help others, that will save _ taste things slowly if you life fast... then it will fade away soon _dedicate time and energy to the things you love (recalled from last year's conference) _made a decision on where are you going to live _live now, it is today right now, right here... _Nature is wiser than us _Nature provides everything we need _be selective about what you want to do _do things that bring joy _what would you do if you got just one week of life.... why don't you do that right now? Maybe you will understand the marvel of the nature "

■ Parallel session on DESIGN AND NEW COMMUNITY; Communities & Social Innovation

Prof. Manzini started the session asking who is involved with new economies, social innovation, sustainability and related issues, because he wanted to state that those who were raising their hands, are part of a Silent Revolution that is going on worldwide. He wanted to state also that to develop new social businesses design can help a lot with its tools, but first, we have to recognize the values. For instance, the fact that the farmer who cultivates rice or olive trees is not only producing goods, but also maintaining the landscape.

The cases presented that afternoon were:
The "Honey Forest Candle. Hachi-Mitsu no Mori Candle – in Japanese.
http://www.mitsurou.com/ an initiative to promote honey in the region, thanks to the project that Mr. Ryuji Ando established. His aim is not to sell honey but to create a whole culture around it.
The MONO School, Manabi Kan -In Japanese-. Located in Yamagata, their idea is to re-use an old facility where a school used to run, an space aiming at become a platform for design and culture for the youngsters of the region, who have established a Japan Design Office. http://japon-design.xii.jp/ (under construction). And finally, the Hanabatake Association Kamigo, an organization working on improving the livelihood of people in the region.

These three examples follow pretty much the line of thought of what is internationally known as Design for Social Innovation and Sustainability. Are ideas and new ways of being "invented" by the users themselves, attesting the fact that nowadays everybody designs, and thus the role of the designers is to help the bottom up to design. Design what? Their livelihood and daily lives.

Those dealing with the topic, found in the presented cases functional and well-established projects. The Mono school for instance, is a great example of the complexity of the issue we are dealing with. Starting from the mere container, the building, the re-appropriation of such space, and the reasons for that (there is lack of students to attend primary classes, a generational gap that has lead to the closing of such facilities in various regions of Japan) the re-appropriation itself, asks for a great deal of creativity and innovative resources-research to set the initiative. Beyond the container, there is the content itself meaning the ideas and nature of the relationships that are established at the interior of the initiative, such as families getting together to help with the project (parents helping their youngsters), value enhancement of the traditional and local knowledge of old people by involving them in some of the activities, specially on what regards to food and agriculture. For example given that important quantities of food are thrown for aesthetic reasons away, they use to go and collect it to distribute it while is still utilizable.
The activities by them pursued have as transversal factor the use of "art" as a mediator and prompter of a certain kind of freedom and spontaneity, the will to do things, the joy of joining them plus the use of new media.

As introduced above the issue of Social Innovation as an issue that has already started to be taken into consideration within the design world, is related, in my view, to the subject of: trust.
If we are to look at examples on social innovation such as the people that from the bottom up, this is: without waiting for top down instances such as the government or the creative class (professional creative people) to manage it, invented new ways of living that fulfill their needs in a rather sustainable way. Examples of this are: co-neighborhood housing, elderly mutual-help households, neighborhood care, micro-nurseries, eco-communitarian markets, collaborative trade networks etc.

Those are prototypes of sustainable ways of living and are related to trust, or better, the issue of trust is one of social innovation's pillars, since for instance, if we take the case of communitarian ateliers, this is: small neighborhood centers where people can take their bicycles and repair them by themselves given that such centres have all the tools that are needed and also voluntary people keen to contribute with their expertise and teach others on the knick and knacks of repairing a bicycle. In this case the organizers of such an initiative have to be confident that the tools will be there, open to the neighbors that freely come, take them, use them and give them back; also an inner trust is cultivated since people start realizing that they can also develop skills to repair a bike etc.
If we are to see, all the examples dealing with this trust, this confidence in the other, in the neighbor, in the stranger at times, and in the issue of sharing, besides, as said, the self-reliance that is nurtured, are part of social innovation and in a greater extend of sustainable ways of living.

The final remarks on this session leaded to talk about what is to be local, what does it mean for the South East? We have to meet Asian people and be cooperative together (is Japan isolated?) what does it mean to be sustainable for people in Asia?

Now, more than conclusions, hereunder some closing quotations brought from the interaction between the auditorium and the presenters:

_Sustainability implies changing the priority in the values that you are searching for.
_To have a real quality you have to slow down
_Diversity of time; that shift in the perception of time is considered as a quality.
_How far we are from the idea of well-being we have
_We have to move from what already exists

There is to say that before the conference, on February the 24th, we were kindly invited to visit cases related with design for social innovation and sustainability, such as the shared office space: TRUNK, in Sendai www.trunk-cos.com and the rural café: TOME an initiative in the surroundings of the city, where organic rice and music are both "grown" and distributed; an initiative for rice and music lovers, their motto is: no music no life / no rice no life http://www.tome-rice.com). Initiatives worth to see, know, join and support.

Until here, the report.

Now, a new stage for Japan is beginning, would it be the stage of go back and keep moving on the track related to ancient traditions? Based on soberness, virtue and simplicity?

Rice will tell...

■ 会議前日開催シンポジウム

「人と環境にやさしい 山形のくらしを考えるシンポジウム ～サステナブルなライフスタイルを描く～」

2011 年 2 月 25 日　文翔館（山形市）
山形県地球温暖化対策課 主催

会議開催前日、山形県地球温暖化対策課主催にて、グラフィック・デザイナーの梅原 真氏を高知県からお招きし、特別セミナーが開催された。ご講演の中では沢山の事例をユーモアを交えながらご紹介頂いた。会場が笑いに包まれる場面も見られた。

シンポジウムの後半では、質問家マツダミヒロ氏の司会進行により、「これからの山形のくらし」をテーマとしたトークセッションが開催された。

「風景とデザイン［一次産業×デザイン］」

特別講演講師　**梅原 真**｜グラフィック・デザイナー

高知県は、色々な経済指標の中でも、べったの 47 番目。その風土に生きてきた僕が考えていることをご紹介しながら、サステナブルというものを考えてみたいと思います。

コミュニケーションの発生 メッセージするデザイン

山形新幹線の車内販売では、コーヒーを頼んだら「はい、どうぞ」とは言わないそうです。「あったけぇのけ? つめてぇのけ?」って山形弁で訊くらしいんです。嬉しいじゃないですか。それを聞いたお隣の方が「僕もあったけぇのちょうでぇ」。そこにコミュニケーションが発生している。僕も似てるんですよ、この考え方。生活者とメッセージするのにデザインという仕事がある。ちゃんと知らせてやることによって、売上げや経済にも繋がる。

到達地点を描いた一枚の絵から始まる

僕、妄想家でしょ。先に絵が出てきちゃうんです。紹介してきた「砂浜美術館」や「鰹一本釣りの藁焼きたたき」、「手摘みのお茶」、「新聞バッグ」、「84 プロジェクト」※にしても、最後の到達地点の絵を一枚描いて始まった企画です。これを見せて始まったんです。砂浜美術館は、町長に「これやろう」と。「四万十川を新聞紙で包もう」が、地球を新聞紙で包むという広がりを持ち始めました。到達地点の一枚が絶対必要だと思うんです。

相対価値でなく、絶対価値を面白がる

これは 2009 年の製造品出荷額の推移のグラフです。このような統計に従った経済指標を押し付けられて、お前のとこは○○番目だとか言われて、みんな競争して頑張る訳ですが、それは相対価値。そうじゃないんじゃないか。

47 番目は 47 番目の個性でしょう? ここで思い直しませんかというお話です。相対価値ではなくて「絶対価値」。高知の鰹のたたきのやり方は高知にしかないし、高知の湿度や温度の中で、段々畑だから手摘みのこのお茶が取れる。ここの部分を面白がりましょうと。みんながこの「絶対価値」を持てば良いんですよ。山形さんもここで輝いたらいいんですよ。僕らもここで輝きますわ。

それぞれの個性を自分達が認識すること

個性とか風土とか、そういう特有のものは、このグラフでいえば下側ほどあるん違うかな、と僕は思うんです。47 番目の人が「高知、良いですよ。」みたいなこと言うても、負け惜しみになるから理論で言いたい。この順番に関係なく、ここも幸せ、こっちも幸せになったらいいんです。そのためには、それぞれの個性を自分達が認識しながらそこでの暮らしをしていくことじゃないのかな、と思います。

ローカルが豊かでなければ、その国は豊かではない

アメリカはニューヨーク、日本は東京が代表ですが、そこを比べるのじゃなく、アメリカのローカルの人が豊かかどうか。日本の田舎の片隅の人が豊かかどうか。これじゃないのかなと思ってます。ローカルが豊かでなければ、その国は豊かではない。僕はべったで面白くやります。お互い、そういう考え方でやりましょう。どうもありがとうございました。

梅原 真　Makoto Umebara

グラフィック・デザイナー。1950 年高知市生まれ。1980 年梅原デザイン事務所設立。デザインを一次産業再生のために使いたい。かつお一本釣り漁業再生のため「一本釣り・藁焼きたたき」をプロデュース。8 年間で 20 億円の産業を作り出す。1989 年、4km の砂浜を巨大なミュージアムに見立てる「大方町・砂浜美術館」をプロデュース。2000 枚の T シャツが砂浜で「ひらひら」する風景を作る。2010 年モンゴル開催。2011 年ハワイで「ひらひら」する予定。1995 年、四万十川のこころざしに合わせ、流域で販売するものはすべて古新聞で包もう!をコンセプトに「しまんと新聞バッグ」をプロデュース。世界に展開中。 2009 年「高知県の森林率 84% は日本一」に自分自身がサプライズ。高知県は CO2 吸収マシンであると捉える「84 はちよんプロジェクト」を 8 月 4 日「はちよん会議」にてスタート。「一次産業×デザイン=ニッポンの風景」という方程式で活動する。著書「ニッポンの風景をつくりなおせ 一次産業×デザイン=風景（羽鳥書店）」、ドキュメント本「おまんのモノサシ持ちや!!（日本経済新聞出版社）」がある。

1

2

1 後半のトークセッションのパネリストは、地元タウン紙編集長の金田理恵氏（大風印刷ガッタハウス）、本会議実行委員長の益田文和（東京造形大学教授）、梅原真氏（グラフィック・デザイナー）、山本良一氏（東京大学名誉教授）。ファシリテーターは山形出身のマツダミヒロ氏（質問家）。「自分の周りだけでなくその延長にある世界のことも考え行動しなければいけない」と山本教授はコメント。2 当日は、植松豊行氏（東北芸術工科大学教授）により「山形版サステナブルライフスタイル絵巻」がお披露目。山形県ホームページ（www.pref.yamagata.jp/kurashi/kankyo/ondanka/7050009yamagataban-emaki.html）にて公開中。

※本文中で十分にご紹介できなかった事例の数々は、梅原氏ご著書中にて詳しくご覧頂けます。

■ 交流会

「第 5 回サステナブルデザイン国際会議 交流会」

2011 年 2 月 26 日　パレスグランデール（山形市）

交流会では、山形の新しいブランド米「つや姫」の塩むすびや山形名物の玉こんにゃくを始め、山形産食材を中心に、素材を活かしたメニューを、株式会社吉水代表取締役の中川誼美氏の監修のもと、会場となったパレスグランデールのシェフが開発。東北芸術工科大学「太凜学生組」（4）による和太鼓の演奏も披露された。

メニュー監修
中川 誼美　Yoshimi Nakagawa

「自然を大切に」をテーマとした宿・食事処、株式会社吉水の代表取締役。慶應義塾大学商学部卒。1970 年より夫と共に自然主義運動まっただ中のアメリカのウッドストックに暮らしたことをきっかけにオーガニックライフを学び、以来その暮らし方が基本となる。「ちょっと前の日本の暮らし」をヒントにこれからの暮らしを考える文化活動を行っている。著書に「ちょっと前の日本の暮らし（中公新書ラクレ）」がある。

1

2

3

4

メニュー　山形のブランド米「つや姫」の塩むすび（1）、山形牛と山形産里芋の名物芋子汁、山形県山寺名物の玉こんにゃく（2）、山形産蕎麦粉 100% 使用の山形蕎麦、庄内産平田牧場三元豚の串揚げ、冷やしラーメンの模擬店の他、野菜の炊き合わせ、お漬物、庄内産ワカメのサラダ、米沢牛コンソメゼリーを添えたコールドミート盛り合せ、海の幸と山形産スティックセニョールイタリア風マリネ、月山豚ロースのグリル黒胡麻ソース、山形産牛ロースのポーピエソトシチュー仕立て、山形産地鶏のプロヴァンス風、庄内産だだちゃ豆のパスタクリームソース、帆立貝柱のポワレ山形産うるい添え、福島産の白身魚山形産の野菜ガーリックパウダーかけ、地元牛乳を使った杏仁豆腐·林檎添え。

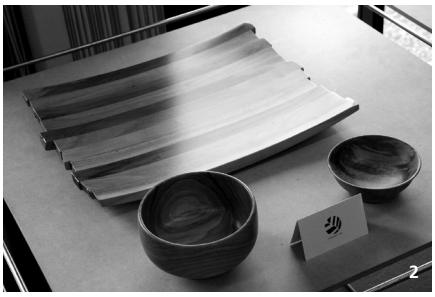
■ 展示会

「やまがた・サステナブル・デザイン展」

2011 年 2 月 26 ～ 28 日　東北芸術工科大学 1F ホール

本会議の会期中に合わせ、山形県内企業の開発したデザインや商品、東北芸術工科大学の学生の提案の展示会を開催した。

1


2

3

4

5

6

1 学生によるサステナブルな暮らしのためのデザイン提案。**2** 長い間、実を結び働いた果樹も役目を終える日が来る。そんな果樹を材料に器などをデザインしている「くだものうつわ」。**3**「菊地保寿堂」の山形鋳物。山形は日本でもっとも古い鋳物の産地のひとつ。（▶P12）**4** オリエンタルカーペットは、昭和 10 年の創業以来、世界の絨毯産業のトップを歩んできた、山形を代表する企業。長く美しく使える特徴から、バチカン宮殿、皇居などでも使用されている。**5** 養蜂業の副産物として採れる蜜ロウをキャンドルにし、森の恵みを伝えている「ハチ蜜の森キャンドル」（▶P15）。**6** 山形を代表する家具メーカーの天童木工の家具も並んだ。　その他、寒河江の出世鯉のぼり、紅花染め、大館の曲げわっぱ（▶P14）、ライスインキ（▶P16）、ライスパスタなども展示された。

■ エクスカーションツアー

「蕎麦打ち体験・樹氷見学」

2011 年 2 月 28 日

photographed by
The International Conference of
Design for Sustainability

エクスカーションツアーとして、蕎麦打ち体験、樹氷見学を行った。当日は確認できたが、蔵王の樹氷は温暖化の影響から、40 年内に消えると予測されている。

■ サステナブルデザイン国際会議 — Small Conference #01

「Smarter Sustainable Debuku ～サステナブルな街･ダビュークに学ぶ～」

2010 年 10 月 21 日（土） 東京ミッドタウン・デザインハブ インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター

講師 **山崎 正人**｜**アクイナス大学 教授**

社会は小さなコミュニティの集まり。その一つひとつのコミュニティがサステナブルであり自立していることが、つまりは社会のサステナビリティに繋がる。サステナブルデザイン国際会議 — Small Conference の第一回目として、アメリカ･ミシガン州のアクイナス大学で経済学助教授を務めておられ、「Cradle to Cradle ／ C2C（ゆりかごからゆりかごへ）」の思想を日本へ伝えることにも取り組んでおられる山崎正人氏に、アメリカのサステナブルな町ランキングで上位に選ばれた町「ダビューク」について伺った。

photographed by The International Conference of Design for Sustainability

ダビュークはとても風光明媚な町で、アメリカの水運の大動脈であるミシシッピ川があり、アイオワ州･ウィスコンスィン州・イリノイ州の 3 州に囲まれ、鉄道や道路も集まっています。シカゴからは 175 マイル。非常に恵まれた立地です。人口は 6 万人、ほとんどがアイルランド系とドイツ系の白色人種で、よく働く、素晴らしい人達です。

ダビュークが経験した 2 つの悲劇的な歴史

1980 年、アメリカで大不況がありました。農業不況から経済不況が訪れ、ダビュークの町も失業率 23%。企業倒産、地域住民の移動と、町にとっては最悪の事態。

そして、もうひとつ、この町の悲劇は洪水の歴史です。雪解水が集まるミシシッピ川は、豊かな水を持っている反面、毎年水位が 7 ～ 8m も上昇し、沿岸の町は悩まされています。このような逆境からダビュークの町は、どのように変化を遂げて行ったでしょうか。

ミシシッピ川から始まった復興 "America's River Project"

まず官民の指導者が草の根の経済復興の発案をし、1990 年から復興のために公共事業が始まりました。どこから始めたかというとミシシッピ川です。ミシシッピ川はアメリカの文化の象徴。被害は被っているけれども、この川をプライドとして人々は生きているのです。1990 年には基本的な復旧を遂げ、2000 年に復興の兆しが見え出し、大きなことを成し遂げたことにより、官民のパートナーシップが生まれました。2005 年には、それはより強い地域の連携となり、復興のための地域教育活動へと発展しています。役人がすべてを作り上げるのではなく、住民が一緒になって「できる」ことを皆で作るのです。

街の方針をサステナブルな街づくりへ

2006 年､ダビュークは街の基本方針を「サステナブルな町づくり」と打ち出します。街の完全な復興のためには経済復興だけでなく、地域の生活の質水準を高めてゆくことだという考えです。そして、その基本となるのが「自然」､「経済」､「住民」という 3 本柱。これを基本方針にし、さらに賢い地域経済や、賢いエネルギー利用についての「11 の原則」を打ち立てました。

2010 年現在、この町では住人の啓発活動というところに移行し、サステナブルシティ推進部隊の結成。人々に「エンパワーメント」、考える力をもたせて、行動してもらおうと。サステナブルな町づくりをするのに、数人の人がやるのではなくて、町全員でやろうということです。皆がいいことをやっていこうという町づくりです。町の勇士ではなく町の住民 6 万人全員がメンバー。町の人達が自発的にそういったビジョンを打ち出して確定して行こうとしています。

IBM とのパートナーシップ この成功を世界に広げるために

ダビュークの町は 2009 年、「smarter city for energy」（エネルギーの節約、利用が賢いという表彰）を受賞しています。大手 IT 企業の IBM がこのことを聞いて、共同開発の話をダビュークへ持ちかけて来ました。一緒に「スマート･プラネット」を作るために、協力しようと。IBM はスマーターテクノロジーを用いてエネルギー消費を瞬時にフォローできるソフト開発をし、ダビュークを賢いエネルギー利用の町にしようという提案です。そして、その成果を全米、世界へ応用していこうというのです。ダビュークは了解し、IBM もダビュークにあったアイオワ州で一番古いデパートを改装して本社にし、移り住んできました。共同開発が進んでいるようです。

サステナビリティを街の文化にする

サステナブルな町の伝統を維持してゆくことは、エンドレスな旅です。努力には終わりがなく、辞めてはいけない。そのためには、住民一人ひとりが自ら動いてゆくことが大事です。官民学のパートナーシップの確立も大事です。それが、サステナブルな文化を作ります。草の根の活動は文化となり、消えてゆかない。風俗や歴史、伝統などとうまく融合すれば、絶対消えないものになるのです。

山崎 正人　Masato Yamazaki

アクイナス大学（ミシガン州／グランドラピッツ）経済学助教授。経済学者。慶應義塾大学にて法学学士号を取得。卒業後、総理大臣 佐藤栄作の政治経済顧問･木内信胤のもと、世界経済研究所で働く。また、ウィリアム･マクダナー、マイケル･ブラウンガートの提唱する「Cradle to Cradle（ゆりかごからゆりかごへ）」の概念を日本に伝え広めることにも取り組んでいる。2009 年からは日本エネルギースターカウンシル（Energy Star= 米国環境保護庁による建物評価プログラム）を東京に設立し、日本の建築物、住宅のエネルギー効率を高めること（新築･既存建築物共に）にもつとめている。共著に「ゆりかごからゆりかごへ入門（日本経済新聞社 2006）」、共同翻訳に「サステイナブルなものづくり―ゆりかごからゆりかごへ（人間と歴史社 2009 ／原著：ウィリアム･マクダナー、マイケル･ブラウンガート）」。

※2010年12月18日(土)開催のサステナブルデザイン国際会議 — Small Conference #02「サステナブルデザイン国際会議拡大委員会」については、掲載を割愛いたします。

■ サステナブルデザイン国際会議 — Small Conference #03

「地方でクリエイティブに生きる・働く〜生活圏の重なりが作るローカリティ— 仙台の事例〜」

2011 年 1 月 22 日（土） 東京ミッドタウン・デザインハブ インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター

小川 直人氏と 1 歳になる娘さん（右）、鹿野護氏（中）、ファシリテーターの久下 玄氏（左）。

photographed by Sayaka Mochizuki

クリエイティブな仕事だからといって、必ずしも大都市が仕事場である必要はないのでは? 地方に拠点があるからって活動範囲が狭められるわけではないのでは?

仙台から鹿野護氏と小川直人氏をお招きし、個々の活動と、地方におけるクリエイティブな仕事について伺った。

鹿野 護 氏のワークスタイル

自分の作るものがどこに届くか 4 つのレイヤーを意識する

個人、企業、研究、インターネット。私はこの 4 つの領域を意識的に行き来してビジュアルのデザインをしています。それぞれの領域で求められる成果や過程は大きく異なるので、自分が今どの領域にいて、どんなデザインが求められているのかを捉える事が重要です。例えば、企業人として製品デザインに携わるのと、住人として街のデザイン携わるのでは要点や優先度が違う。

最近、過去の文化を継承しながらも、新しい事に挑戦をされている方に、とても刺激を受けます。デザインを始めたばかりの頃は、独自の個性や新しさなど、インパクトのある要素に影響を受ける事が多かったのですが、最近では長い時間の流れの中にある価値を意識する事が多くなりました。15 年間の経験の中で「かっこいい」の定義が大きく変わり、特に、地元の松島に対する捉え方も大きく変わりました。地元の歴史を学び、これまであまりに軽視してきた事を悔やみながらも、次第に誇りのようなものが生まれています。今では、それを子供や孫といった世代に繋げていかなければと考えています。

表現活動の意義を考える時に、それが商業的なのか芸術的なのかという二元論的考えに陥ってしまう事が多々あります。でも本来は、そうした枠組みから考えるのではなく、始めに表現があるはず。デザインする事を、例えば食事のような、もっと自然な行為として同じように考えたい。そうすることで枠組みに囚われない新しいデザインが可能になるはず。そのためには新しい空き地のような領域が必要で、これから 10 年、そうした領域をしっかり作り出し、継続していければと考えています。

プレゼンター

鹿野 護　Mamoru Kano

東北芸術工科大学卒。WOW（東京と仙台に拠点をおくビジュアルデザインスタジオ／ www.w0w.co.jp）アートディレクター。WOW 自主企画プロジェクトとして iPhone アプリや大型インスタレーションなどを制作、国内外で積極的に展示・発表している。2009 年 iPhone アプリ「二十世紀ボヤージ」を未来派図画工作（www.zugakousaku.com）からリリース。著書「QuartzComposer Book」。

小川 直人氏のワークスタイル

この街の人と動きを繋いで何かできないか

今年はこの通り育児に専念しようと思いお休みしていますが、準備室からずっとせんだいメディアテークで学芸員をしてきました。映像文化が担当で、映画祭やワークショップなどのオーソドックスなものから、講演の企画を本にしたり、やたら大きな音の出る展示などもやったりしています。映画なんて極めて大都市的な文化でもあると思うのですが、メディアテークでの仕事を通じ「こういうことを地方都市からでも始められるんだな」と思うようになりました。その本業の傍ら、2 つのことを考えつつ logue などの活動をやるようになりました。

ひとつは、この街の人と動きを繋いで何かできないか。残念ながら有り余る程の人材が仙台にいるわけではないのは事実。でも安易に東京のリソースに頼らず、細やかに街のなかを繋いでいけば色々できるとも感じます。僕にとって仙台はただ仕事のための場所ではなく、子供の時から暮らす土地でもある。仕事を通じて学んだことや繋がりを、仕事の枠だけに囚われず生かしたいという思いもあります。

もうひとつは、ちょっとした投資でできることはやってみた方がよい。僕は自治体が作った財団所属で、いわゆるお役人みたいなもの。余程悪いことをしない限り首にはならないというか、あまり何もしない方が楽なんです（笑）。でも、そういう立場の人こそ実験的な事をした方が良いと思ってます。こんな社会状況だと、せっかく面白いアイデアがあっても小さなリスクを心配して実現一歩手前で止まってしまうことも多い。だったら、リスクが少ない人がそれを引き受けた方が計算上は理に叶っている。あるいは「謝ってすむことは謝ろう」、そういう役割を担うのはありかなと。

プレゼンター

小川 直人　Naoto Ogawa

1975 年生まれ。学芸員／プランニング・ディレクター。大学で文化政策・アートマネジメントを研究し、2000 年よりせんだいメディアテーク（www.smt.city.sendai.jp）。上映やワークショップ、学校教育など映像文化に関わる企画全般を担当する他、映像に限らず開かれた場における人や活動に関する実践を行う。また、メディアテークと併行して映画やライブ、出版物の制作にも関わる。

地方でクリエイティブに生きる・働くには?

消費することに慣れすぎないこと

消費することに慣れすぎないこと。僕達の多くは、モノから価値観まで何か与えられたものを消費することに慣れてしまっている節があります。特に地方都市だと。それはおそらく、バブルの時代まで至上命令のように消費してきたからかもしれませんが。個人の姿勢の問題かもしれませんが、仕事をするというのは供給側になるということだと思うので、そのことは常に気をつけています。（小川）

簡単な対立構造に納めない

自分のやりたいことを軸に繋がってゆくコミュニティがあって、それは海外も含めてなんですが、そのベルトの一部に自分がいることが自分が仙台にいる意味だと思っています。あるビジュアルを作る時に、自分一人ではなく、その繋がりで協力して作ってゆくのですが、その繋がりは物理的な地域性とは関係ない。抽象的なんですが、自分はそこをクロスしていて、風通しのよいデザインをしながら、その時に地方の歴史とか文化を継承した状態でやれればなと思っています。（鹿野）

logue　ローグ

2007 年、鹿野氏、小川氏を含む 4 名の有志にて立ち上げられた仙台を拠点とした「創造のための対話」をテーマにしたプロジェクト。地域の固有性を保持しながら、場所に限定されない「生活圏」としてのローカリティをテーマに様々な活動を展開している。
www.project-logue.jp

ファシリテーター

久下 玄　Hajime Kuge

インダストリアルデザイナー。家電メーカーのインハウスデザイナーを経て、tsug.LLC 設立。情報機器から家電製品、日用品、企業の先行開発や新規事業開発まで幅広い領域にてハードウェアや UI・UX のデザイン、エンジニアリング、コンセプトメイク、プロデュースに携わる。慶應義塾大学 SFC 研究所員（訪問）として次世代通信のデザイン研究も行っている。www.tsug.co.jp

本報告書および過去の会議の報告書、また、今後の活動の最新情報については下記ホームページにて公開しております。ご覧ください。

For English Information, please see our web site.

www.sustainabledesign.jp

第 5 回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022　報告書

2011 年 6 月 17 日　第 1 刷発行

発行：　サステナブルデザイン国際会議実行委員会

編著：　サステナブルデザイン国際会議事務局

執筆協力：　神坂 礼子、皆川 めぐみ

写真：　前野 一樹、中川 浩子（有限会社 ジェイピーディー）

望月 小夜加（フリーランス）

問合先：　サステナブルデザイン国際会議事務局

105-0013 東京都港区浜松町 1-22-8（有限責任事業組合エコデザイン研究所内）

TEL. 03-6826-1511　FAX. 03-3578-1459　mail@sustainabledesign.jp

www.sustainabledesign.jp　　on twitter @Destination20XX, #SUSIM

©2011 The International Conference of Design for Sustainability

2011.6.1000　FSC 認証紙「ライトスタッフ GA-FS」使用